INABE SITE

2015

稲部遺跡第2次発掘調査報告書　―市道芹橋彦富線道路改良工事に伴う発掘調査―

2015　彦根市教育委員会

彦根市埋蔵文化財調査報告書第61集

稲 部 遺 跡
第 2 次発掘調査報告書

―市道芹橋彦富線道路改良工事に伴う発掘調査―

2015

彦根市教育委員会

稲 部 遺 跡
第２次発掘調査報告書

―市道芹橋彦富線道路改良工事に伴う発掘調査―

2015

彦根市教育委員会

1　調査区北半遠景（南東から）

2　調査区北半全景（北から）

巻頭図版 2

1　調査区南半全景（北西から）

2　縄文時代後期　SH03竪穴建物（南から）

1　弥生時代終末期から古墳時代前期初頭　掘立柱建物群（東から）

2　SB01掘立柱建物（北東から）

3　SB02掘立柱建物（北東から）

巻頭図版 4

1　SB03掘立柱建物（北から）

2　SB03（SP52）柱根検出状態（西から）

3　SB03（SP69）柱根検出状態（東から）

例　　言

1．本書は、彦根市教育委員会が、市道改良工事に伴い、平成25年７月24日から平成25年12月27日にかけて実施した、稲部遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
整理調査については、平成26年６月10日から平成27年３月にかけて行った。

2．本調査の調査地は、彦根市稲部町字上サクラ434番、435番、436番、437番に位置する。

3．本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課が実施した。調査の体制は下記のとおりである。

平成25年度（現地調査）
教育長：前川　恒廣
文化財部長：入江明生　　文化財部次長（兼文化財課長）：西田哲雄
課長補佐：久保達彦
史跡整備係長：北川恭子　　文化財係長：木戸洋平
主査：深谷　覚　　主査：池田隼人
副主査：三尾次郎　　主任：森下雅子
主任：林　昭男　　主任：戸塚洋輔
主任：下高大輔　　技師：田中良輔
臨時職員：佃　昌幸

平成26年度（整理調査）
教育長：前川　恒廣
文化財部長：長谷川　隆司　　文化財部次長：西山　武
文化財課長：久保達彦
課長補佐（兼文化財係長）：木戸洋平　　史跡整備係長：北川恭子
主査：深谷　覚　　主査：池田隼人
主査：三尾次郎　　副主査：森下雅子
副主査：林　昭男　　副主査：戸塚洋輔
主任：下高大輔　　主任：田中良輔
臨時職員：沖田陽一　　臨時職員：堀田佳典

4．現地調査と整理調査は戸塚が担当し、以下の諸氏が参加した。
現地調査：赤田　隆　阿部修平　岡田ひとみ　久保豊和　小林良夫　左近健一朗
佐渡　宏　高橋時子　西村　薫　久木正弘　平田清司　森谷義男（作業員）
大西　遼（滋賀県立大学大学院生）　北森　光（滋賀県立大学大学院生）
荘林　純（滋賀県立大学学部生）
整理調査：岡田ひとみ　金澤信子　西村陽子（作業員）
李　在桓（滋賀県立大学大学院生）　沖田陽一　堀田佳典（臨時職員）

5．本書で使用した遺構実測図は、大西　遼、北森　光、荘林　純、田中、戸塚が作成し、遺物実測図については、北森　光、沖田陽一、戸塚が作成した。
遺構の写真撮影は、戸塚と田中が、遺物の写真撮影は戸塚が行った。

6．現地調査及び本書の作成にあたり、以下の方々や機関からの助言・協力を得た。
林　良彦　箱崎和久　鈴木智大　細川修平　森岡秀人　北原　治　奈良文化財研究所

7．本書の執筆及び編集は、戸塚が行った。

8．本書で使用した方位は、平面直角座標第Ⅳ系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。

9．本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

稲部遺跡

目　　次

巻頭図版
例言

第１章　序　論
1　調査に至る経緯 …… 1
2　調査の方法と経過 …… 5
3　地理的・歴史的環境 …… 7
（1）地理的環境 …… 7
（2）歴史的環境 …… 9

第２章　調査成果
1　基本層位 ……15
2　縄文時代 ……19
（1）概　要 ……19
（2）遺構と遺物 ……19
（3）小　結 ……21
3　弥生時代終末期から古墳時代前期 ……22
（1）概　要 ……22
（2）掘立柱建物 ……22
（3）柵 ……33
（4）井　戸 ……33
（5）小　結 ……39

第３章　総　括
1　稲部遺跡における縄文時代の集落 ……41
（1）愛知川流域における縄文時代集落の様相 ……41
（2）今後の課題 ……41
2　稲部遺跡における弥生時代終末期から古墳時代前期の掘立柱建物群 ……42
（1）はじめに ……42
（2）掘立柱建物の時期認定 ……42
（3）掘立柱建物群の変遷 ……42
（4）掘立柱建物群の性格 ……43
（5）今後の課題 ……45

出土遺物観察表
図版
報告書抄録

図版目次

巻頭図版

1　1　調査区北半遠景（南東から）
　　2　調査区北半全景（北から）
2　1　調査区南半全景（北西から）
　　2　縄文時代後期　SH03竪穴建物 （南から）
3　1　弥生時代終末期から古墳時代前期初頭
　　掘立柱建物群（東から）
　　2　SB01掘立柱建物（北東から）
　　3　SB02掘立柱建物（北東から）
4　1　SB03掘立柱建物（北から）
　　2　SB03（SP52）柱根検出状態（西から）
　　3　SB03（SP69）柱根検出状態（東から）

図　版

1　1　調査前風景（南から）
　　2　調査前風景（北東から）
2　1　調査区南半全景（北東から）
　　2　調査区南半全景（南から）
3　1　調査区北半全景（北から）
　　2　調査区北半全景（北から）
4　1　縄文時代後期　SH03竪穴建物 （南から）
　　2　縄文時代後期　SH03竪穴建物(北東から)
5　弥生時代終末期から古墳時代前期初頭
　　掘立柱建物群（東から）
6　SB01掘立柱建物（北東から）
7　SB02掘立柱建物（北東から）
8　1　SB03掘立柱建物（北から）
　　2　SB02（SP27）（南西から）
　　3　SB03（SP70）　柱痕（北から）
9　1　SB03（SP52）　柱根（西から）
　　2　SB03（SP68）　柱根（北から）
　　3　SB03（SP69）　柱根（東から）
　　4　SB03（SP63）　柱根（北から）
10　1　SE01井戸（南から）
　　2　SE01井戸土層断面（南から）
　　3　SE01井戸遺物出土状態（南から）
11　1　SB04掘立柱建物・SE01井戸（北から）
　　2　調査風景（北から）
12　1　SH03・包含層出土縄文土器（１）
　　2　SH03・包含層出土縄文土器（２）
13　1　SB03（SP53）柱根
　　2　SB03（SP63）柱根
　　3　SB03（SP68）柱根
　　4　SB03（SP69）柱根
14　1　SB03（SP52）柱根
　　2　掘立柱建物・柵出土土器
15　1　SE01出土土器（１）
　　2　SE01出土土器（２）
16　1　SE01出土槽
　　2　SE01出土木器
　　3　SE01出土斧柄

図表目次

挿　図

第１図　稲部遺跡の位置……２
第２図　調査区の位置……３
第３図　試掘調査トレンチ配置図……４
第４図　調査風景……５
第５図　中学生発掘体験……５
第６図　SP01棒状青銅製品の出土状態　……５
第７図　現地説明会……６
第８図　遺物の復元……６
第９図　遺物の実測……６
第10図　稲部遺跡周辺の遺跡分布……８
第11図　肥田西遺跡調査区位置図・全体図……11
第12図　肥田西遺跡 SZ01出土弥生土器　……12
第13図　調査区西壁土層断面……15
第14図　調査区西壁土層断面図……15
第15図　噴砂……16
第16図　噴砂の断面……16
第17図　調査区全体図……18
第18図　SH03竪穴建物　……19
第19図　SH03出土縄文土器　……20
第20図　小穴出土縄文土器……21
第21図　SB01掘立柱建物　……26
第22図　SB02掘立柱建物　……27
第23図　SB03掘立柱建物　……28
第24図　SB05掘立柱建物　……29
第25図　SB06掘立柱建物　……30
第26図　SB07掘立柱建物・SA01柵・SA02柵…31
第27図　SB03掘立柱建物　柱根　……32
第28図　掘立柱建物・柵出土土器……33
第29図　SB04掘立柱建物・SE01井戸　……34
第30図　SE01井戸　……35
第31図　SE01井戸出土土器　……36
第32図　SE01井戸出土木器　……37
第33図　弥生時代終末期から古墳時代前期に
　　おける掘立柱建物の変遷……44

挿　表

第１表　稲部遺跡における発掘調査……１
第２表　掘立柱建物一覧……24
第３表　出土遺物観察表……48

第１章　序　論

１　調査に至る経緯

稲部遺跡は、彦根市稲部町に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である。かつて1981年には、稲枝東小学校の南側において宅地造成工事に伴う第１次調査が行われ、古墳時代初頭前後の土器が多く出土する遺跡として注目され、当該期の集落が周辺に存在している可能性が指摘されていた。今回の第２次調査は、稲部遺跡の本調査としては32年ぶりの調査となる。隣接する遺跡としては稲部西遺跡、彦富南遺跡が知られているが、各遺跡との境界は明確に区分できるものではない。特に稲部遺跡と稲部西遺跡については、ほぼ同時期の遺構が両遺跡にまたがって存在しており、同一の遺跡群として把握できる可能性がある。

調査区は、彦根市稲部町字上サクラ434番、435番、436番、437番に位置する。今回の調査は、稲枝駅周辺地域の整備事業に関連する市道芹橋彦富線道路改良工事に伴うもので、工事に先立ち提出された文化財保護法第94条の通知及び依頼にもとづく本発掘調査である。なお、芹橋彦富線と交差する東西方向の道路である稲部本庄線の道路改良工事予定地については、稲部西遺跡と稲部遺跡の範囲に該当し、平成25年度から本発掘調査を実施している。

道路計画範囲は古墳時代初頭の集落遺跡として周知される稲部遺跡の範囲内に位置し、遺跡の存在が予想されたため、計画地のうち買収済の範囲を対象として、平成25年２月５～７日、遺構の有無を確認するために試掘トレンチ９箇所を設定して範囲確認調査を行った。その結果、文禄川よりも南側のトレンチ３箇所で遺構と遺物が確認され、道路改良工事に先立ち発掘調査を実施する必要性が指摘された。このため、協議を経て、遺構と遺物が確認され、平成25年度において調査の実施が可能な道路予定地790.65㎡を対象として、平成25年７月24日～平成25年12月27日まで、本発掘調査として現地調査を実施した。その後、平成26年６月10日～平成27年３月にかけて整理調査を行い、本報告書の刊行となった。なお、第２次調査区よりもさらに南側の範囲においても、平成25年度に実施した確認調査によって遺構が確認されており、遺跡の範囲はより南側へ及んでいることが確認されている。この結果を受けて、平成26年度においては、第２次調査区の南側の範囲においても、961.82㎡を対象とし、第３次調査となる本発掘調査を実施している。

第１表　稲部遺跡における発掘調査

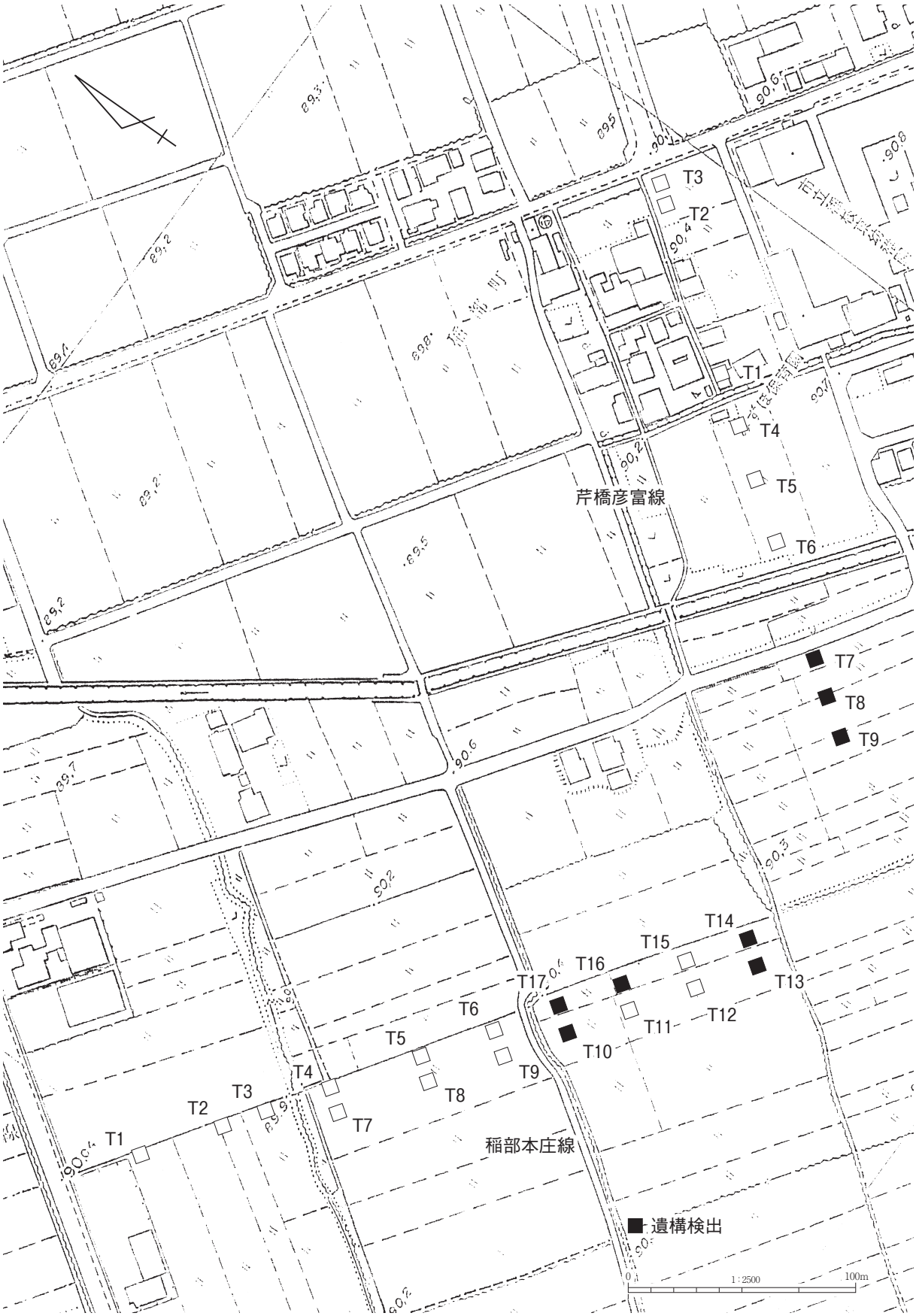
調査番号	調査原因	調査期間	調査主体	主な時代	文献
１次	宅地造成工事	1981. 2～1981. 3	彦根市教育委員会	弥生時代後期～古墳時代前期	1
２次	市道改良工事	2013. 7～2013. 12	彦根市教育委員会	縄文時代後期・弥生時代終末期～古墳時代前期	本書

文　献
1　彦根市教育委員会　1982『稲部遺跡発掘調査概要報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告第３集

第１図　稲部遺跡の位置

稲部１次（1981）
稲部２次（2013）
稲部４次（2014）
稲部３次（2014～2015）
稲部西２次（2014～2015）
稲部西１次（2013～2014）
0
1:5000
200m

第２図　調査区の位置



第３図　試掘調査トレンチ配置図

2　調査の方法と経過

調査区の設定　発掘調査を実施した範囲は、道路予定地に合わせた細長い調査区である。このため、調査にあたっては、道路予定地に平行した任意方向の５ｍ間隔グリッドを設定した。報告にあたっては、任意方向のグリッドを国家座標に合わせ直し、周辺調査地点との整合をはかった。

表土掘削　全ての地区の近現代及び近世の水田の耕作土は、重機（バックホー）を用いて除去した。耕作土の下には愛知川の洪水によって堆積したと考えられる青灰色の粘質土層が一部確認され、遺構検出が可能な基盤層に達する。ただし、基盤層上面から深さ約10 cmまでの範囲では、鉄分の沈着が著しく、遺構の検出が困難であるため、基盤層よりも鉄分の沈着が希薄になる基盤層から約５cm下の面まで掘削を行った。また、排土置き場を周辺に確保できなかったことから、調査区を北半分と南半分に分け、南半分を先に掘削して調査を行った後、掘削土を反転させて残りの北半分を調査する方法をとった。

遺構精査　遺構検出面である基盤層は、グライ化した粗粒砂を含む灰色粘質土で、粘性がきわめて強いものである。一方、遺構の埋土は暗灰色の粘質土で、基盤層よりもわずかに暗い程度の色調の差であるため、遺構検出作業は困難であった。遺構埋土の掘削においても、粘性のきわめて強い埋土であり、掘削中に水が湧き出してくることから、掘削に手間取り、予想以上の時間がかかった。遺構内の調査に当たっては、セクションベルトを設定して埋土の把握に努めた。埋土が特徴的な遺構については土層断面図を作成した。遺構内の主な出土遺物は出土状態図を作成し、取り上げを行った。

第４図　調査風景

第５図　中学生発掘体験

第６図　SP01棒状青銅製品の出土状態

記録の作成　遺構の平面図と土層断面図は適宜水糸を張り、縮尺20分の１で人力により作成した。遺物の出土状態図は、縮尺10分の１とし、できるだけ平面と立面を図化した。

調査の経過　遺構は竪穴建物、掘立柱建物、井戸、土坑、柵、小穴、中近世の耕作溝で構成され、各遺構は同一面で認識できる。８月末から９月10日にかけて南半分の遺構検出を終え、９月11日からは遺構の掘削を開始したが、９月11日には小穴の上層から棒状青銅製品が出土した。９月13日、晴天のなか、河瀬中学校２年生４名が職場体験として発掘調査に参加し、遺構の掘削を体験した。ところが、９月15日～16日にかけては、大雨のために調査区は田面から10cm の深さまで冠水し、大きく作業を困難にする事態となった。地下水位が高い土地であるため、基盤面まで掘り下げると湧水が顕著となることもあいまって、排水作業が終始調査の大きな課題となった。その後、９月20日には棒状青銅製品の出土したレベルの直下から、古式土師器甕口縁部片が出土し､明確な共伴土器が特定された｡その後、遺構検出時から炭の集中が認められていたSH01竪穴建物の精査にかかった。建物内には炭を多く含む小穴があり、小穴の埋土はすべてふるいがけを行ったが、遺物は含まれていなかった。10月４日には南半部の全景写真を撮影し、10月15日から南半分を埋戻し、北半分の掘削を開始した。11月には、北端部の落ち込みと SK20をはじめとする多くの土坑が確認され、大型土坑を含む土坑群からは、多数の古式土師器が出土した。なかには完形品に近いものもあり、出土状態図を作成後、慎重に取り上げを行った。こうした成果を受けて、11月24日には現地説明会を開催し、地元住民の方々を中心に50名の参加を得た。また、11月27日には彦根市建設技術協会・彦根土木協会の現地視察研修会において現地説明を行い、36名の参加を得た。北半部の全景写真と測量を終え、12月16日からは、落ち込みと遺構がさらに北側へ展開することが判明し

第７図　現地説明会

第８図　遺物の復元

第９図　遺物の実測

たため、調査区を拡張したところ、遺構面の上で布留式古段階の土器を含む包含層が確認され、この包含層が落ち込み部分から連続して広がることがわかった。

整理調査　報告書作成作業は彦根市民会館において、現地調査終了後の暫定整理を経て、平成26年６月10日から平成27年３月まで行った。なお、諸般の事情により、第２次調査で検出された弥生時代終末期から古墳時代前期の竪穴建物、土坑群と土坑出土土器、その他の一部の遺構と出土遺物については、来年度以降に刊行される報告書において報告する予定である。

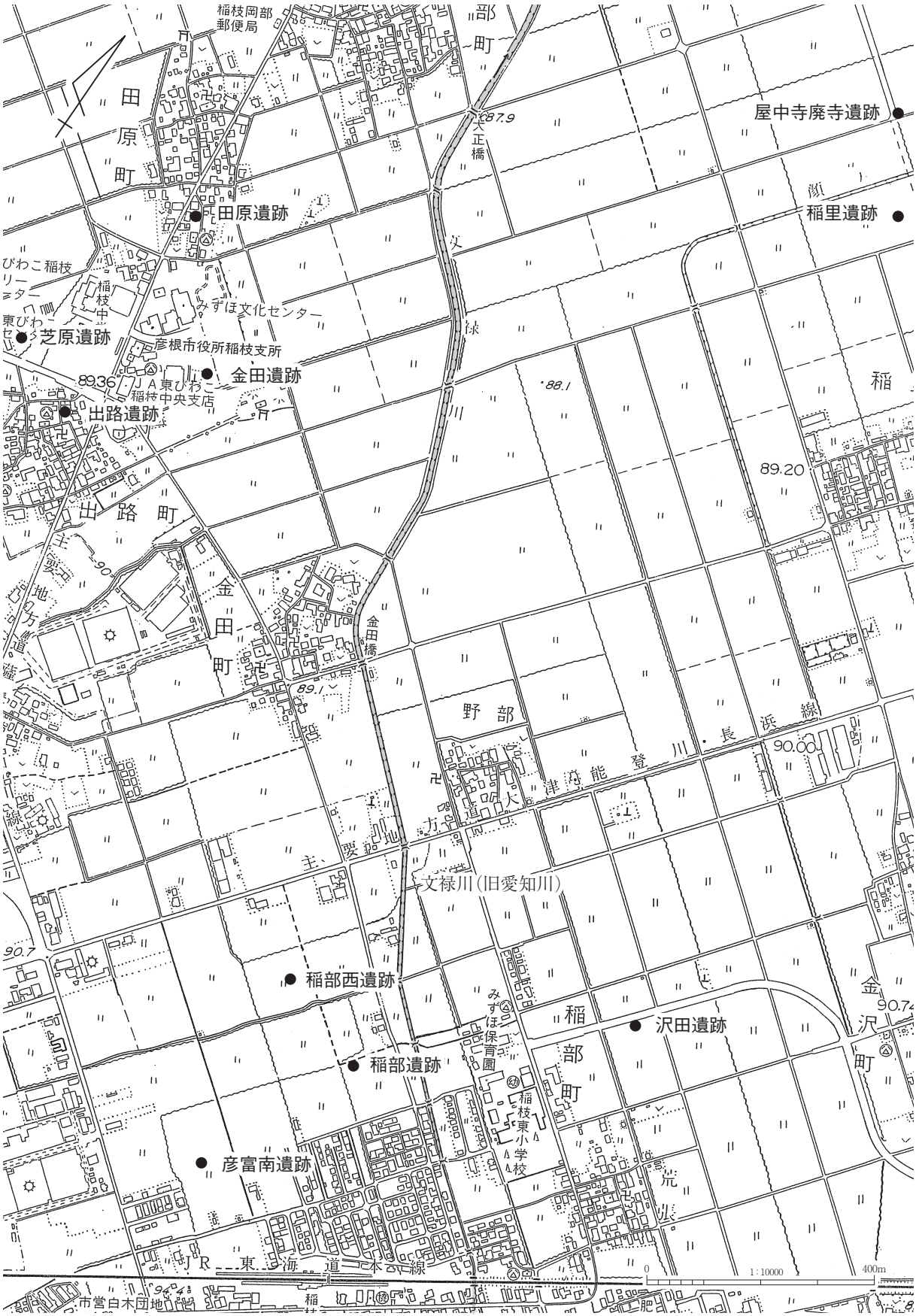
3　地理的・歴史的環境

（１）地理的環境

稲部遺跡は、北の宇曽川、文禄川と南の愛知川の間に位置するが、北端は文禄川に隣接する位置関係にある。愛知川の河道は、16世紀に洪水によって現在の河道へと変化したと推定されており、それ以前の愛知川の河道の状況と地理的関係をふまえておく必要がある。かつての愛知川は、稲部町、彦富町から湖岸の薩摩町、柳川町へと流れていたが、その旧愛知川の河道が文禄川と来迎川である。来迎川は２次調査区から南へ約600m の位置を流れ、彦富町から柳川町へと至る。文禄川は２次調査区の北側を流れ、稲部町から薩摩町へ至る。このように、稲部遺跡は、旧愛知川の河道に挟まれた微高地上に立地している。

愛知川は、中流付近までは河岸段丘を形成し、その下流は天井川となっている。現在の下流部河道は、JR 東海道本線愛知川鉄橋の付近から西に曲がり、新海浜の河口まで達している。現在の河道は、16世紀の洪水によって河道が変化するまでは支流であり、かつては愛知川中宿から北行する本流が、甲崎町まで蛇行しながら琵琶湖に注いでいたと考えられる。湖岸には浜堤が発達し、その背後にある標高86m 以下の低地部には後背湿地や内湖が広がっていた。愛知川河口部付近から石寺町付近までは入江や水路があり、低湿な景観が展開していた。現在でも、柳川町に残る湾入部や荒神山山麓の曽根沼がその名残をとどめている。

また、愛知川は氾濫による洪水を頻発しており、過去の記録によると、文化６年（1806）には、田附町の「湯の花井」の堤防が決壊し、国領村の集落50戸のうち40戸が流出するという災害のあったことが知られる。こうした環境のなかで、人々は洪水によって形成された自然堤防上に村落を営み、洪水の被害に耐えながら耕地の経営を行っていたのであろう。現在分布する集落の多くが、愛知川の堤防沿い、あるいは旧河道に残る自然堤防上に立地することからも、このことをよく示している。明治初期に作成された地籍図によると、現在の集落の位置とほとんど変わらず、少なくとも近世の集落と現在の集落の位置は、ほぼ一致しているといえる。また中世の集落についても、中世から近世につながる集落が多いという発掘調査の成果を考慮すると、ほぼ重複している可能性がある。さらに、現在確認できる遺跡の分布状況をみると、自然堤防上に連なっていることに注目できる。すなわち、出路町から甲崎



第10図　稲部遺跡周辺の遺跡分布

町をへて薩摩町に至る文禄川流域、彦富町西側から普光寺町をへて薩摩町西側に及ぶ来迎川流域、そして本庄町から南三ツ谷町を結ぶ範囲の三つの地域は、愛知川によって形成された自然堤防であるとみられ、縄文・弥生時代以降の遺跡が分布しているのである。

（２）歴史的環境

縄文時代　縄文時代の遺跡では、屋中寺廃寺遺跡で縄文時代早期後半の押型文土器、中期の船元式や北白川Ｃ式土器が包含層から出土している。愛荘町なまず遺跡では、晩期後葉の土器棺が検出され、愛荘町長野遺跡においても同時期の土器が出土している。肥田町肥田城跡では、晩期の刻目凸帯文土器が出土している。

弥生時代　弥生時代になると、前期の遺跡では稲里町稲里遺跡で炭化米、アワ、キビが出土し、水稲農耕が開始されている。

宇曽川左岸の微高地上に立地する肥田西遺跡では、1983年に行われた発掘調査において弥生時代中期後半の方形周溝墓の周溝とみられる溝が検出され、一部の溝から弥生土器が出土している（第11・12図）。湖東地域における当該期の遺構と遺物としては数少ない重要なものであり、紹介しておきたい。調査成果の詳細は不明であるが、４トレンチと５トレンチで方形周溝墓の周溝とみられる溝が検出されている。４トレンチの溝は最大幅1.5m 程度のもので、方形にめぐる可能性があり、溝が連結することから、列をなす方形周溝墓群である可能性が高いものである。しかし、残念ながら遺物が出土していない。方形周溝墓であるとすれば、周溝の内側下端で測って約９ｍの規模である。

５トレンチでは、長さ10m、幅50cm 程度の溝 SD01が検出され、溝の南端部からはほぼ完形の弥生土器３点が共伴して出土した。１は、完形の水差形土器である。器高30.1cm、口径10.1cm、胴径20.4cm、底径11.5cm を測る。口縁部には凹線文をめぐらせ、一部意図的に打ち欠かれている。体部は算盤玉状になり、頸部には刺突が、肩部から胴部最大径になる位置までの間には、上から直線文と波状文が交互にそれぞれ３単位、その下に刺突が施文される。脚部の端部に面がとられる。断面方形の把手が一つつき、外面には刺突が施される。橙色の胎土である。２は、ほぼ完形の壺形土器である。器高51.0cm、口径21.2cm、胴径35.5cm、底径7.3cm である。口縁部に凹線文をめぐらせ、頸部には刺突文を施した扁平な突帯を貼り付けている。体部は全体にハケ調整を施す。褐灰色の胎土である。３は、底部のみを欠く甕形土器である。器高は29.5cm 程度と推定できる。胴径は21.0cm である。口縁端部に刻み目はなく、口縁部内外面は横ナデ調整である。外面中位から上半部はタタキののち縦ハケを施す。タタキ目は右下がりである。内面上半部は斜めハケで調整し、下半部はナデ調整である。にぶい黄橙色の胎土である。これらの土器は、いずれも弥生時代中期後半（Ⅳ様式期）の特徴をもつ土器である。１が算盤玉状の体部をもち、２の頸部から口縁部への開きが大きいことから、Ⅳ様式後半の土器群で、凹線文系土器の良好な一括資料と評価できよう。

SD01と組み合う溝の存在は不明であるが、完形の近い土器がまとまって出土している点、水差形土器の口縁部にみられる打ち欠き、４トレンチにおける方形周溝墓とみられる遺構の

存在から、SD01は、周溝の四隅が途切れる弥生時代中期後半の方形周溝墓の周溝である可能性がある。北側のSD02も同様にその可能性があろう。したがって、４トレンチの方形周溝墓についても弥生中期後半頃のものである可能性が高い。このように、少なくとも４基以上の方形周溝墓が存在すると推定され、そのうち１基はⅣ様式期で、他の３基もほぼ同時期のものと推定される。方形周溝墓域としては、彦根市域で最も古い例である。

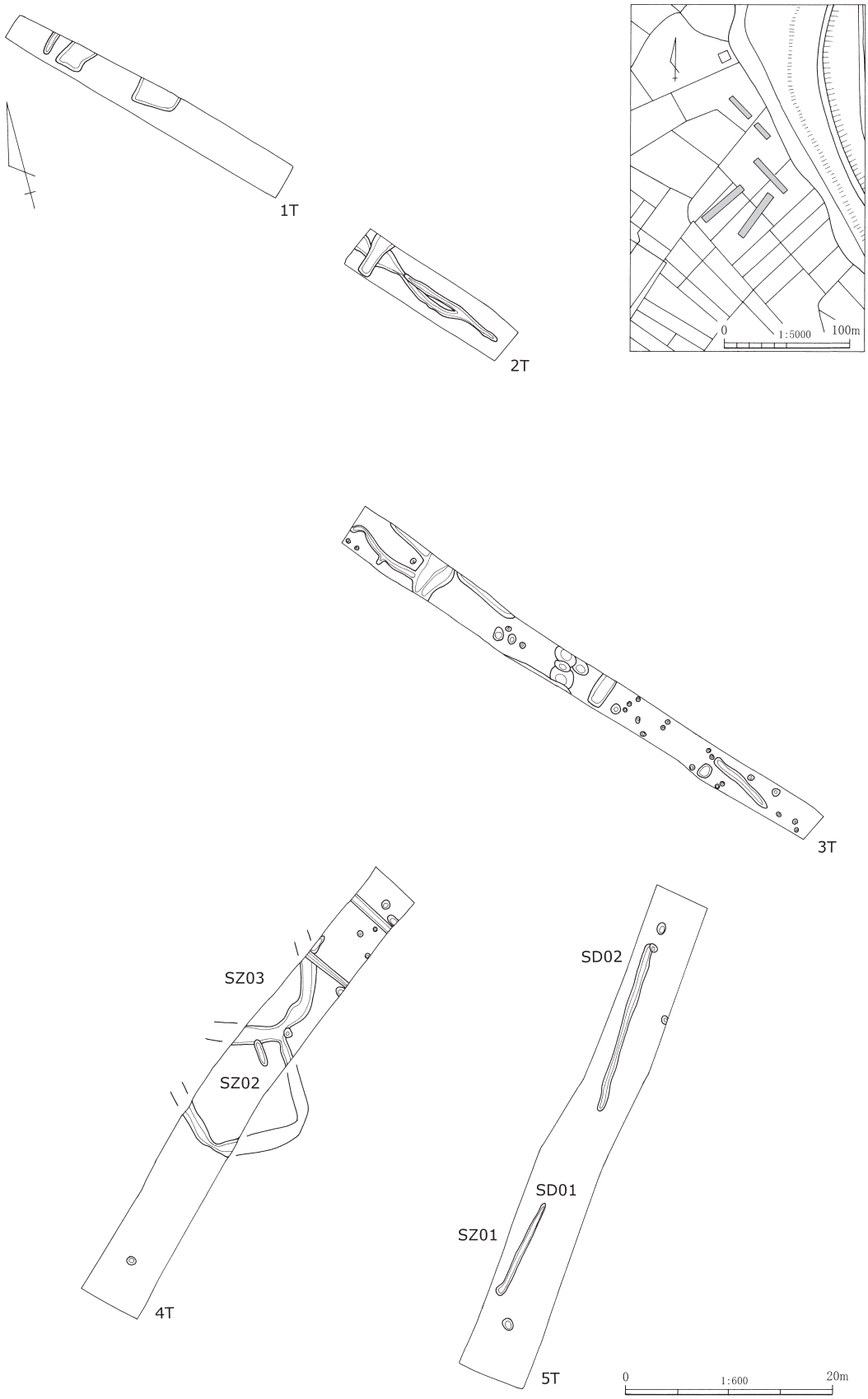
また、長野遺跡、なまず遺跡、屋中寺廃寺遺跡、荒神山東麓に位置する妙楽寺遺跡と川瀬馬場遺跡で遺構と遺物が確認されている。弥生時代後期では、妙楽寺遺跡で集落が継続し、竪穴建物が検出されている。

弥生・古墳移行期　弥生時代終末期から古墳時代前期にかけては、稲部遺跡、長野遺跡で古墳時代初頭の土器が出土している。稲部遺跡では、1981年２月２日～３月19日にかけて宅地造成に伴って１次調査が行われ、遺構の状況は不明であるが、包含層から庄内式古段階から布留式古段階を中心とする土器が多数出土した。受口状口縁甕、壺、高坏、器台、手あぶり形土器、小型丸底壺といった豊富な器種がみられ、注目される。より湖岸に位置する普光寺町の普光寺廃寺遺跡でも近い時期の集落が確認され、庄内式期を中心とした古式土師器が出土している。肥田城跡では、庄内式期の導水施設が検出され、２本の木樋が出土し、屋中寺廃寺遺跡でも同様な木樋が出土しており、両者ともに当該期の灌漑技術に関わる遺構として注目される。

古墳時代　古墳時代前期には、本庄町の芝原遺跡で主に竪穴建物からなる集落が確認され、４世紀後半の竪穴建物からは、鞴の羽口片と鉄滓が出土し、４世紀代の数少ない鍛冶工房の例として注目できる。古墳時代中期の様相は不明瞭であるが、古墳時代後期の集落として芝原遺跡と出路遺跡が知られる。なまず遺跡では６世紀末の大壁造建物が検出され、渡来系氏族との関係が推測される。

古墳では、荒神山山頂部に全長124mを測る古墳時代前期末の前方後円墳である荒神山古墳が築かれる。これに続く明確な中期古墳は確認されていないが、荒神山南裾に馬蹄形の地割痕跡がみられ、「塚村」の地名ともあわせて前方後円墳の存在する可能性が指摘されている。仮に古墳であるとすると、墳丘長105m、周濠を含めると158mの大型古墳となる。後期には、荒神山に群集墳が営まれ、中には正方形プラン穹窿頂持ち送り石室をもつ古墳も築かれ、やはり渡来系氏族との関係がうかがわれる。その他、普光寺町のゲホウ山古墳で埴輪をもつ後期古墳、肥田町の塚乞手古墳で埴輪と木製立物をもつ後期古墳が確認されている。

古代　古代になると、市域南部の湖岸近くに普光寺廃寺、屋中寺廃寺、下岡部廃寺、八坂廃寺の白鳳寺院が建立される。奈良時代には、荒神山北麓の東大寺領覇流荘の存在が知られる。正倉院に残る墾田絵図によると、愛知・犬上両郡にまたがる70町が東大寺に施入され、覇流荘が成立したという。また、延久２年（1070）の『近江国弘福寺領庄田注進状』により愛知郡２条７里・８里・３条16里に弘福寺領平流荘が存在したことが記されており、和銅２年（709）の『弘福寺水陸田目録』に「依智郡田壱拾壱町壱段参拾陸歩」とみえることから、



第11図　肥田西遺跡調査区位置図・全体図

第12図　肥田西遺跡 SZ01出土弥生土器

弘福寺領平流荘は８世紀初頭には成立していたものと考えられている。具体的な所在地としては、荒神山南麓の下岡部廃寺と屋中寺廃寺に挟まれた地と推定されている。

この時代の遺跡としては、普光寺廃寺遺跡、芝原遺跡、肥田城跡、国領遺跡、長野遺跡、なまず遺跡、沓掛遺跡が確認されている。長野遺跡、なまず遺跡、沓掛遺跡付近には、古代東山道に比定される近世中山道が通り、愛知郡衙の存在も想定されている。長野遺跡では奈良時代後期の「上殿」、「寺」の墨書土器や転用硯、なまず遺跡では「郡」の墨書土器、沓掛遺跡では「愛女」の墨書土器や転用硯などが出土している。長野集落にある大瀧神社はもと「大領宮」と号していたことも注目される。平安時代になっても国領遺跡では続いて集落が営まれるが、再び普光寺廃寺遺跡、芝原遺跡、肥田城跡でも集落が確認されている。なかでも芝原遺跡では９世紀の京都産緑釉陶器皿、畿内産黒色土器碗、灰釉陶器皿の転用硯がまとまって出土し、一般集落とは異なる様相である。

中世　中世では、平安後期から鎌倉時代にかけての集落が国領遺跡、普光寺廃寺遺跡、市遺跡で営まれる。国領遺跡では15世紀以降の柿経が出土している。宇曽川下流域に立地する妙楽寺遺跡では室町時代を中心とする遺構が検出され、15世紀末から16世紀後半には、条里地割に方位を揃える水路と道路によって整然と区画された屋敷地が検出されている。貿易陶磁や茶道具も多く出土し、琵琶湖と宇曽川の水運によって繁栄した商業を生業とする都市的空間であったと考えられている。この妙楽寺遺跡と宇曽川を隔てた対岸には古屋敷遺跡が位置する。道路や土塁で区画された屋敷地が確認され、存続時期が妙楽寺遺跡と一致することから、両遺跡は一体のものと捉えられている。しかし、妙楽寺遺跡が水路によって区画されているのに対し、古屋敷遺跡では道路や土塁で区画されている点や古屋敷遺跡では妙楽寺遺跡に比べて茶器よりも日常雑器の占める割合が高いなどの違いも認められる。

室町時代後期には、肥田城跡をはじめとした城館が築かれる。肥田城は、高野瀬氏が築城し、織豊期では蜂屋氏、長谷川氏の居城となった。肥田城の中枢部としては、小字「上新田」、「下新田」であったと推定されている。また、その北西側と南西側には「勘ケ由屋敷」、「孫右衛門」、「藤蔵屋敷」、「丹波屋敷」、「休ケ屋敷」、「新助屋敷」、「民部屋敷」、などの小字があり、家臣団屋敷がひろがっていたと考えられている。

近世　稲部遺跡周辺は、明治７年（1874）に稲部村と改称されるまでは、野部村という村名であった。明治時代初頭の地籍図によると、江戸時代には大部分を水田が占める村であったことが知られる。

参考文献

伊庭　功　2003「近江南部の中期弥生土器―様式と器種構成―」『古代文化』第55巻第５号　財団法人古代学協会

愛知川町教育委員会　1985『沓掛遺跡・市遺跡Ⅲ発掘調査概要』

愛知川町教育委員会　2002『なまず遺跡』

愛知川町　2005『近江愛知川の歴史　第１巻』
兼康保明　1990「近江地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅱ』　木耳社
北原　治　2002「弘福寺受領愛智郡平流荘について」『紀要』第15号　財団法人滋賀県文化財保護協会
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1986『妙楽寺遺跡Ⅰ』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1986『妙楽寺遺跡Ⅱ』
彦根市教育委員会　1987『古屋敷遺跡発掘調査概要報告書』
彦根市教育委員会　1988『馬場遺跡』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1988『肥田城遺跡発掘調査報告書』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1989『妙楽寺遺跡Ⅲ』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1995『普光寺廃寺・屋中寺廃寺』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1997『芝原遺跡』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1998『屋中寺廃寺遺跡』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1998『普光寺廃寺遺跡発掘調査報告書』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1999『神ノ木遺跡・堀南遺跡』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1999『長野遺跡』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　2001『長野遺跡Ⅱ』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　2001『稲里遺跡』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　2003『市遺跡』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　2006『八坂東遺跡』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　2006『国領遺跡』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　2008『長野遺跡Ⅲ』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　2008『肥田城Ⅰ』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　2010『肥田城遺跡・肥田西遺跡・鶴田遺跡』
彦根市　2007『新修彦根市史　第１巻』
彦根市教育委員会　1982『稲部遺跡発掘調査概要報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告第３集
彦根市教育委員会　2008『荒神山古墳Ⅲ・Ⅳ』彦根市文化財調査報告書第２集
彦根市教育委員会　2011『川瀬馬場遺跡Ⅲ』彦根市埋蔵文化財調査報告第47集
彦根市史編纂委員会　2001『彦根　明治の古地図Ⅰ』

第２章　調査成果

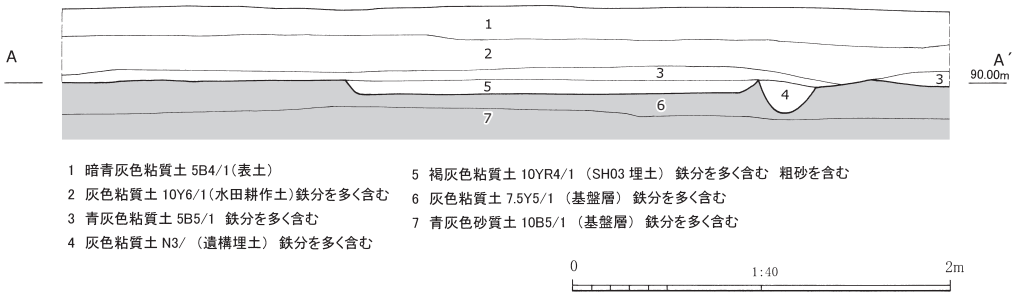
１　基本層位

稲部遺跡における基本層位としては、地表面から順に１～６層に分類できる。１層は、灰色粘質土で、近現代の水田耕作土である。２層は、灰黄色粘質土で、１層に伴う床土である。３層は、青灰色粘質土で、時期は特定できないが、洪水による堆積層と推定される。調査区全域で確認できるわけではなく、SH03部分とその周辺で認められた。４層は、暗褐色粘質土で、庄内式期から布留式期の古式土師器を含む包含層である。調査区北端部の落ち込み部分から北側にかけて、25～30cm の厚さで堆積している。５層は、灰色粘質土の基盤層である。粗粒砂を含み、粘性が強い。基盤面の標高は、89.80m～90.00m で、北端部の落ち込みに向かって低くなっている。基盤面まで掘り下げると、湧水が顕著となり、地下水位は高い。５層の15～20cm 下では、基盤層が粘質土から青灰色砂質土に変化しており、これを６層としておく。２～７層は、いずれも鉄分を多く含み、特に５層の基盤層上面には鉄分が顕著に沈着しており、遺構検出を困難にしている。

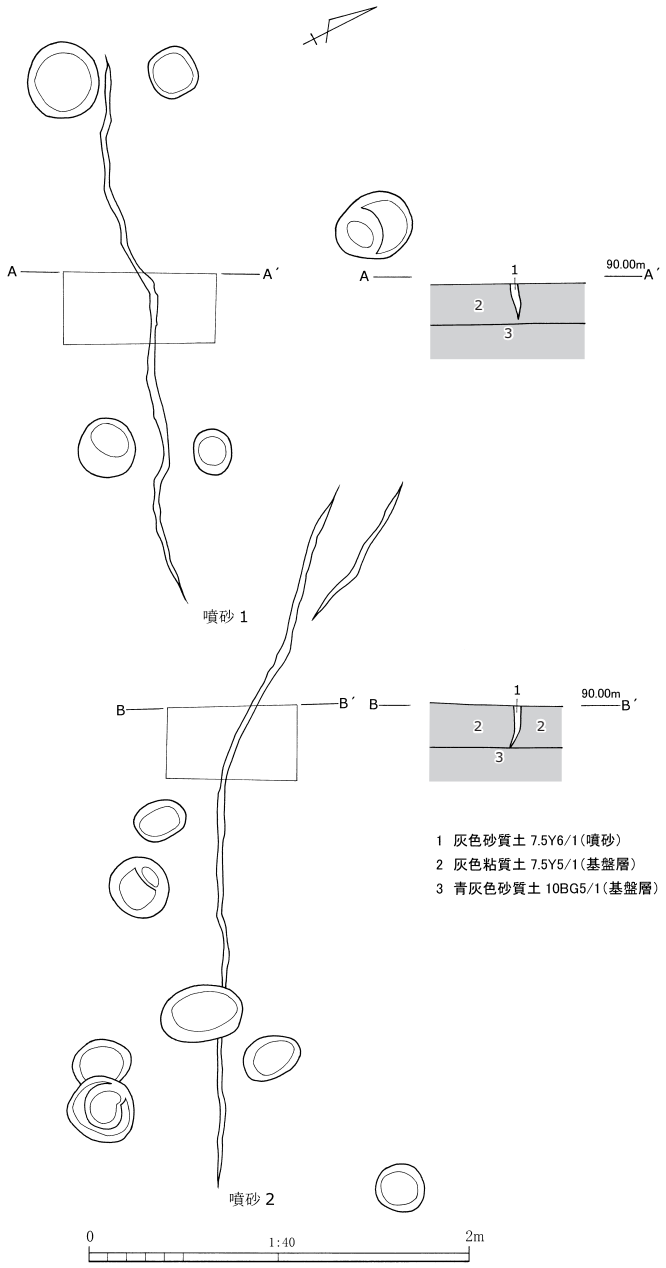
第13図　調査区西壁土層断面

なお、調査区南端部の SB01と SB02の位置する部分では、小規模な２か所の地震痕跡が認められている。噴砂１は約３m、噴砂２は約3.8m の長さにわたって基盤面に露出し、灰色砂質土の噴砂が、液状化現象によって幅３～４cm で下層から噴出している状況が確認された。基盤面まで掘り下げた後に検出され、上の耕作土まで達しているかどうかは確認できなかったため、液状化現象の原因となった地震の時期については不明である。

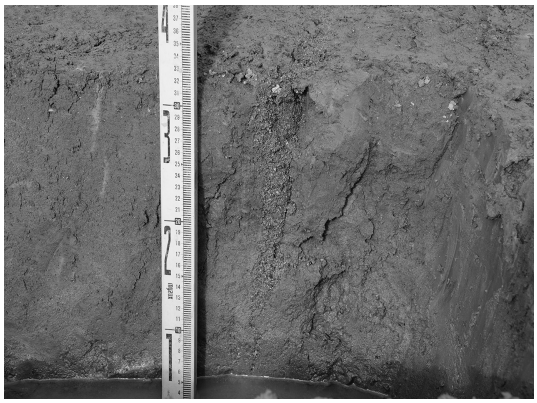
遺構検出は、水田面下30～40cm 程度の基盤層である５層上面で行った。検出面の標高は、



第14図　調査区西壁土層断面図



第15図　噴砂



第16図　噴砂の断面

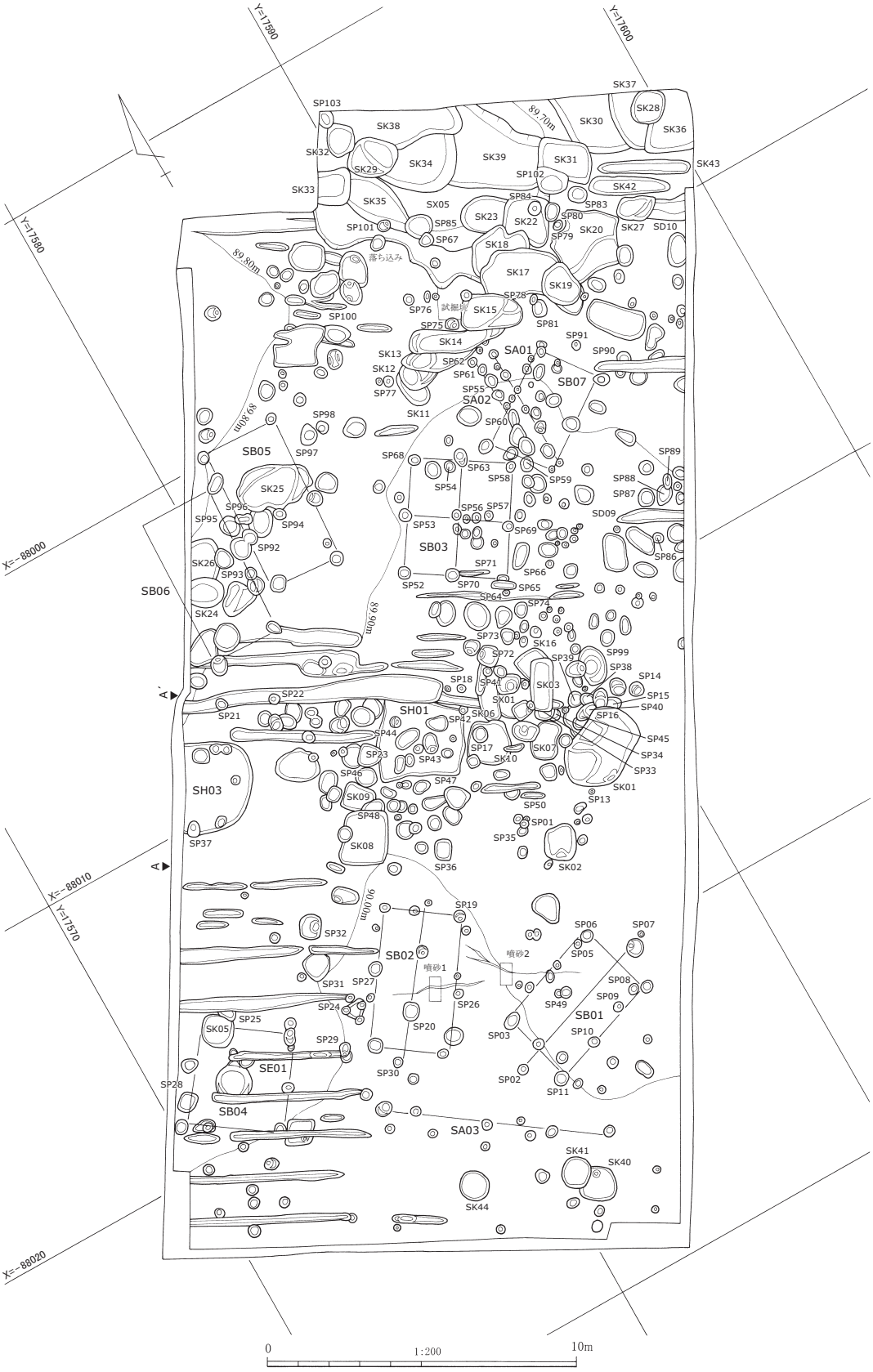
89.80m～90.00mで、北端部が低い。検出された遺構の大半は、弥生時代終末期から古墳時代前期のものである。埋土は暗灰色粘質土で、しまり、粘性ともに強い土質で、基盤層よりもわずかに色調が暗く、しまりが強いのが特徴である。そのため、鉄分の沈着とあいまって、遺構検出はやや難しい。なかには、SH03などの縄文時代後期の遺構がわずかに認められ、遺構の埋土は褐灰色粘質土となっている。また、調査区全体にわたって、溝が多数検出されている。埋土は、青灰色粘質土で、砂質土を多く含み、しまり、粘性ともに弱いものである。東西方向に規則的に並び、一部を除いていずれも深さ5cm以内ときわめて浅い。これらの溝からは、遺物がほとんど出土していないが、水田耕作土と検出面からは、平安時代の須恵器甕、灰釉陶器碗、中世の天目茶碗、近世の陶磁器が出土している。小片のために図示できないが、わずかに平安時代から近世にかけての遺物も認められる。近世の陶磁器が出土していることから、これらの溝は、近世の耕作に関わる溝であると推定される。当該地は、明治初期に作成された地籍図によると、水田地帯となっていることからも、これらの溝は、江戸時代の耕作溝である可能性が高いと考えられる。ただし、耕作が開始された時期については、不明である。なお、これらの耕作溝については、

弥生時代終末期から古墳時代前期の溝と区別するために、調査区全体図では遺構番号を付与していないことをことわっておく。

このように、今回の調査で検出された遺構と遺物の大半は、弥生時代終末期から古墳時代前期のものである。全体的に遺構は耕作による削平を受け、縄文時代後期の遺構や近世の耕作溝も散見された。

参考文献

寒川　旭　1990「湖国の地震考古学（上）・（下）」『文化財教室シリーズ』114・115　財団法人滋賀県文化財保護協会


Y=17590
Y=17600
Y=17580
Y=17570
X=-88000
X=-88010
X=-88020
SB01
SB02
SB03
SB04
SB05
SB06
SB07
SA01
SA02
SA03
SH01
SH03
SE01
SK01
SK02
SK03
SK05
SK06
SK07
SK08
SK09
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK16
SK17
SK18
SK19
SK20
SK22
SK23
SK24
SK25
SK26
SK27
SK28
SK29
SK30
SK31
SK32
SK33
SK34
SK35
SK36
SK37
SK38
SK39
SK40
SK41
SK42
SK43
SK44
SD09
SD10
SP01
SP02
SP03
SP05
SP06
SP07
SP08
SP09
SP10
SP11
SP13
SP14
SP15
SP16
SP17
SP18
SP19
SP20
SP21
SP22
SP23
SP24
SP25
SP26
SP27
SP28
SP29
SP30
SP31
SP32
SP33
SP34
SP35
SP36
SP37
SP38
SP39
SP40
SP41
SP42
SP43
SP44
SP45
SP46
SP47
SP48
SP49
SP50
SP52
SP53
SP54
SP55
SP56
SP57
SP58
SP59
SP60
SP61
SP62
SP63
SP64
SP65
SP66
SP67
SP68
SP69
SP70
SP71
SP72
SP73
SP74
SP75
SP76
SP77
SP78
SP79
SP80
SP81
SP83
SP84
SP85
SP86
SP87
SP88
SP89
SP90
SP91
SP94
SP95
SP96
SP97
SP98
SP99
SP100
SP101
SP102
SP103
SX05
噴砂1
噴砂2
試掘坑
落ち込み
89.70m
89.80m
89.90m
A
A'
0
1:200
10m

第17図　調査区全体図

2　縄文時代

（1）概　要

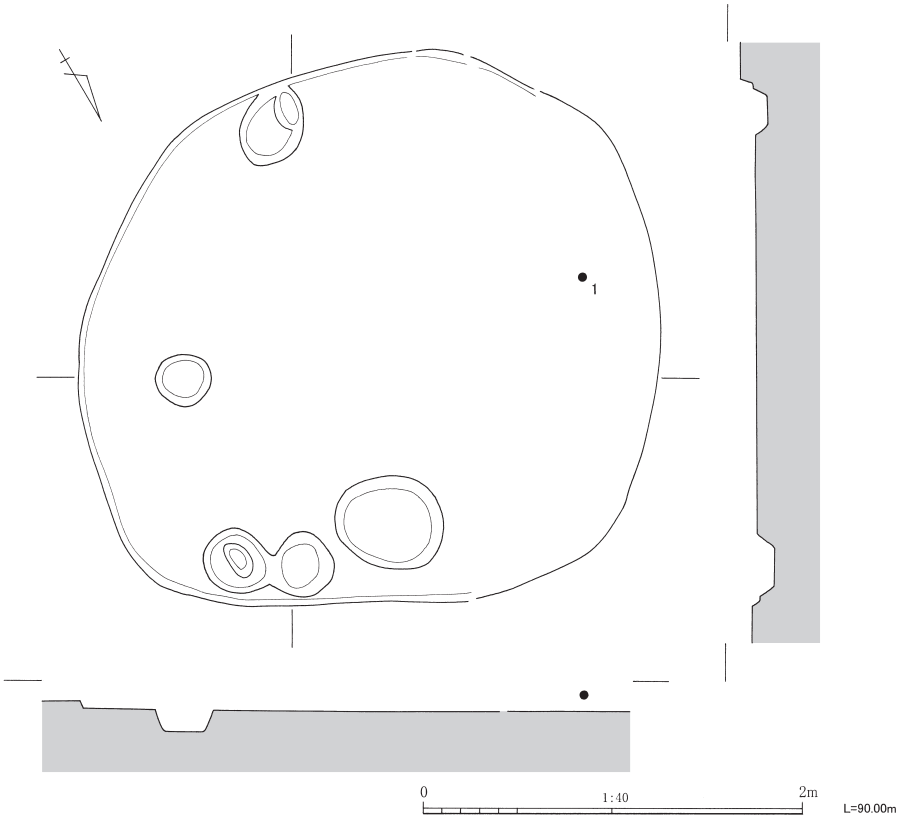
縄文時代の遺構としては、SH03竪穴建物が検出された。他にも縄文土器が小穴から出土しているが、弥生時代終末期から古墳時代前期の遺構に混入したものである可能性があり、明確な縄文時代の遺構は、SH03のみである。弥生時代終末期から古墳時代前期の遺構と同一面で確認された。

（2）遺構と遺物

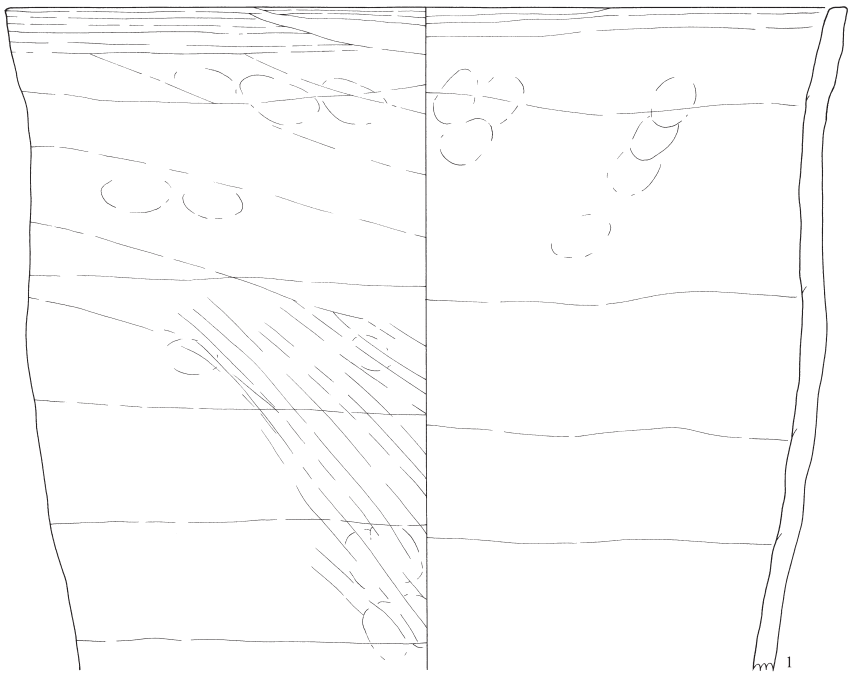
SH03（第18図）　竪穴建物で、掘方がわずかに5cm程度残る。西端部が調査区外に広がっているが、平面は不整円形と推定できる。推定復元すると、長さ3m以上の規模である。竪穴建物内には、6つの柱穴の可能性がある小穴が検出されたが、南西隅のSP37からは、古式土師器が出土しているため、SP37はSH03に伴うものではない。埋土は褐灰色粘質土で、基盤層と比べてはっきりしない色調である。

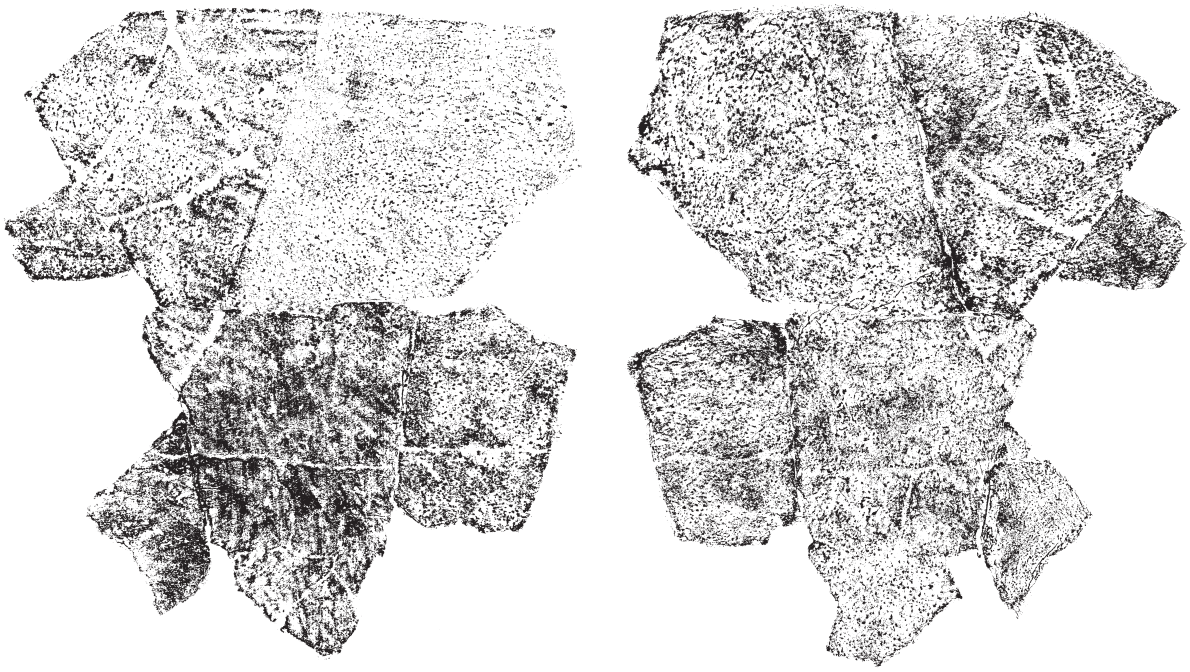
調査区周囲に側溝を設定し、掘削している際に、縄文時代後期の深鉢（1）が内面を上にして横位で出土した。その後、遺構と調査区壁面の土層の精査によって、1がSH03の床面で出土したことが判明した。埋土からは、この他に遺物は出土していない。

1は、口径が推定復元で33cmの深鉢である。外面には粘土紐の継ぎ目痕が明瞭に残り、



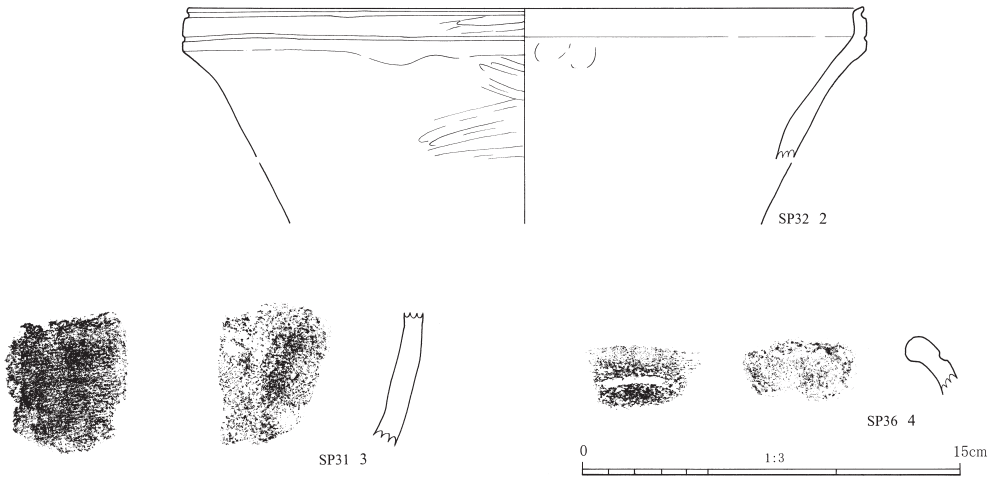
第18図　SH03竪穴建物





0　1:3　15cm

第19図　SH03出土縄文土器



第20図　小穴出土縄文土器

口縁上部と胴部の一部にヘラ削りがなされ、全体に指ナデの痕がよく残っている。口縁端部から内面上部にかけては横ナデ調整で、指抑えによる整形後にヘラ削りと指ナデによる調整が行われているようである。口縁から13cm 程度下までの部分の胎土は粗雑で、それより下の部分については、やや粗いもののきめ細い胎土である。縄文時代後期の縁帯文土器に含まれる粗製深鉢である。

平面形、出土遺物、埋土の特徴から、縄文時代後期の竪穴建物であると考えられる。

小穴出土遺物（第20図）　小穴 SP32、SP31、SP36からは、縄文土器が出土したが、弥生時代終末期から古墳時代前期の遺構に混入した可能性もある。２は、SP32から出土した鉢である。口縁部外面には２条の沈線をめぐらし、胴部は横ないし斜め方向のミガキ調整である。内面はナデ調整で、上部には指頭圧痕がみられる。胎土はやや粗雑である。３は、SP31から出土した深鉢の胴部片である。外面は横方向のミガキ状の調整で、内面はナデ調整である。胎土は粗い。４は、SP36出土の浅鉢口縁部片である。口縁外面には１条の沈線をめぐらし、内外面ともにナデ調整である。胎土はやや粗い。１～３は、縄文時代後期の縁帯文土器であろう。

（３）小　結

今回の調査では、稲部遺跡ではじめて縄文時代後期の遺構と遺物が検出された。特に竪穴建物が検出され、縄文時代後期の土器が出土したことにより、縄文時代後期の集落が存在したことが判明した。旧愛知川である文禄川流域における縄文時代の様子を知る重要な知見が得られた。

参考文献

千葉　豊　2008「縁帯文土器」『総覧　縄文土器』　アム・プロモーション

3　弥生時代終末期から古墳時代前期

（1）概　要

2次調査で主体となる時期である弥生時代終末期から古墳時代前期の遺構は、調査区全域に広がる。北端部には谷状に落ち込みがあり、旧愛知川の文禄川へ向かって地形が下がりはじめる位置にあたる。落ち込み部分から北にかけては、厚さ25～30cmの包含層が形成され、包含層の下の基盤面においても当該期の遺構が確認された。包含層には布留式期古段階までの土器が含まれている。

主な遺構としては、掘立柱建物7棟、柵3条、井戸1基、竪穴建物1棟、土坑約40基、溝2条が検出された。掘立柱建物には、梁行の方向に対称的に棟持柱がつく建物も含まれている。掘立柱建物と柵には、規模や建物方向に共通性がみられ、何らかの規格に基づいて配置されている。すべての建物が同時に併存しているわけではなく、掘立柱建物と柵がきりあい、柵と近い軸をもつ建物がみられるなど、建物群には時期的な差があり、いくつかの段階があるものと考えられる。覆い屋を伴うと考えられる井戸が掘立柱建物と並ぶ点も注目できる。竪穴建物SH01は、小型のものであるが、建物内に炭を多く含む小穴が伴い、付近の小穴から連鋳式銅鏃の端部とみられる棒状青銅製品が出土するなど、青銅器鋳造などの金属器生産に関わる工房跡とみられる。SH01周辺の土坑についても、SH01と関連する廃棄土坑や溜桝状遺構が含まれている可能性がある。

（2）掘立柱建物

桁行5m前後の掘立柱建物が多く、規模については、第2表に示す。

SB01（第21図）　調査区南東部で検出された掘立柱建物で、SB02とは少し軸を違えて並ぶ。梁行は、東側が1間、西側が2間であるが、基本構造は桁行3間、梁行1間とみられる。東西に棟持柱の付く独立棟持柱建物である。建物の規模は、桁行3.84m、梁行2.6mを測り、棟持柱まで含めると長さ5.2mとなる。平面積は、9.98㎡である。

柱穴の平面形はどれも円形で、径は22cmから56cmまでの幅があり、35cm前後のものが多い。東側の棟持柱の柱穴、西側の隅柱の径が50cm以上と比較的大きい。柱穴の埋土は暗灰色粘質土を基本とする。柱穴SP02には、径6cm、長さ10cm程度の柱根が残存していたが、非常に脆く、調査中に崩壊してしまったため、取り上げることができなかった。柱穴SP06、SP10、SP11、SP02では、土層断面の観察により、灰色粘質土の柱痕跡と柱の当たり痕跡が確認された。一方、SP03では、柱痕跡が観察されず、柱が抜き取られたとみられる土層の堆積を示していた。

柱穴SP06、SP09、SP10、SP11、SP02、SP03からは、古式土師器の小片が出土したが、大雨によって柱穴から流出してしまったため、土器がいずれの柱穴に伴うのかは、残念ながら不明である。これらの土器のなかで、壺の口縁部片（10）は、上記のいずれかの柱穴から

出土したもので、SB01の時期を示す遺物として、唯一図化することができた。他の小片については図示することができない。

SB02（第22図）　調査区南中央部で検出された掘立柱建物で、SB01とは少し軸を違えて並ぶ。梁行は、基本構造は桁行３間、梁行１間とみられる。建物中央には桁行方向に２本の柱がともなう。東西に棟持柱の付く独立棟持柱建物である。建物の規模は、桁行4.3m、梁行2.6m を測り、棟持柱まで含めると長さ5.2m となる。平面積は、11.18㎡である。

柱穴の平面形はどれも円形で、径は24cm から64cm までの幅があり、35cm 前後のものが多い。柱穴の埋土は、暗灰色粘質土である。柱穴 SP19には、径８cm、長さ６cm 程度の柱根が残存していたが、非常に脆く、調査中に崩壊してしまったため、取り上げることができなかった。その他の柱穴では、柱穴の底で柱の当たり痕跡が認められた。

柱穴 SP19、SP26、SP20、SP30からは、古式土師器の小片が出土した。SP26出土の器台（11）、SP30出土の甕の可能性が高い土器（12）を示す。11は、外面が横ミガキ調整、内面がナデ調整である。その他の遺物については、小片のために図化できない。

SB02の南西隅には、小穴 SP27と SP24に連なる小穴群があり、周辺部では SB02以外に関連しそうな遺構が見当たらず、SB02に伴う遺構である可能性が考えられる。SP27は径34cm、深さ20cm を測り、５～６cm 大の円礫が埋土にほぼ均一に含まれており、意識的に充填しているような状況であった。土層断面の観察を行ったが、明確な柱痕跡はみられなかった。ただし、埋土の特徴は SB02の柱穴と近似し、当該期の遺構である可能性は高い。また、隣接する SP24とこれに連なる小穴群は、径が近く、深さもほぼ等しいものであった。３つの小穴が三角形の掘方を共有しているものと判断された。SP24からは、古式土師器小片が出土したが、小片のために図化できず、SP27とその他の柱穴からは遺物は出土していない。

SP27と SP24に連なる小穴群の性格ははっきりしないが、仮に SB02の出入り口が南西部に位置していたとするならば、出入り口に付設される梯子あるいは階段の柱穴であると推定することもできる。このように考えると、SP27に含まれていた円礫についても柱の根固めを意識したものとみることもできる。野洲川流域の下鈎遺跡では、礫埋め工法として円礫を充填した掘立柱建物の柱穴があり、こうした工法に類するものである可能性が考えられる。

SB03（第23図）　SB03は、調査区中央やや北よりで検出された掘立柱建物である。２間×２間の構造で、総柱建物である。建物の規模は、3.8m×3.28m で、平面形は正方形に近い。平面積は、12.47㎡である。柱穴は円形で、径32cm～52cm である。柱穴の埋土は暗灰色粘質土で、柱痕部分は灰色粘質土である。

SP68、SP63、SP69、SP52には、柱根が残存していた。SP68の柱根（７）は、横倒しの状態で検出されており、柱根の向きからみて、北東あるいは南西方向からの力が加えられているものと推定される。厚さ5.8cm、残存長13.2cm を測り、腐朽により柱の全径はとどめておらず、一部が遺存していた。柱の復元径は、15cm 前後と推定される。

SP63の柱根（６）は、同様に横倒しの状態で検出された。柱の根本がわかり、柱の向き

からみて、北東方向からの何らかの力によって柱が倒れたものと推定される。厚さ4.7cm、残存長14.6cm を測る。柱下端部の加工痕がよく残っている。やはり腐朽により、柱の全経はとどめていない。柱の復元径は15cm 前後と推定できる。

SP69の柱根（８）は、正位に据えられた状態で検出された。もう一つの柱材が斜位で隣り合って出土したが、非常に脆く、取り上げることができなかった。８は、残存長10.2cm、厚さ15.6cm で、柱の復元径は約24cm である。残存している柱根のなかでは大型の部類になる。

SP52の柱根（９）は、正位に据えられた状態で検出された。残存長39.5cm、厚さ14.1cm を測る腐朽により、柱の全径はとどめていないが、残存していた柱根のなかでは最も遺存状態がよい。復元径は30cm 以上と推定できる。

SP53の柱根（５）は、詳細な出土状態は不明であるが、残存長7.6cm、厚さ5.0cm である。腐朽により、全径をとどめない。柱の復元径は、15cm 前後と推定できる。

土層断面の観察では、SP70、71で柱痕跡が認められ、SP69では土層の状況より、柱が抜かれている可能性の高いことがわかった。

土器が出土した柱穴もあり、SP63出土の甕肩部（13）、SP52出土の壺口縁部（14）、SP52下層出土の高坏脚部（15）を図示する。15の外面は縦ミガキの調整である。他にも SP58、SP71、SP70、SP53から古式土師器片が出土したが、小片のために図化できない。

SB05（第24図）　SB05は、調査区北西部で SB06と並んで検出された掘立柱建物である。桁行２間、梁行１間の構造で、桁行の柱間は、北側が少し長い。建物の規模は、桁行4.8m、梁行2.3m で、平面積は11.0㎡である。建物の主軸は正南北に近い。柱穴は円形で、径32cm～60cm である。柱穴の埋土は、暗灰色粘質土である。柱穴 SP92からは、古式土師器甕胴部片（16）が出土した。外面は斜めハケの後、ナデ調整で、内面はナデ調整である。外面には煤が付着する。

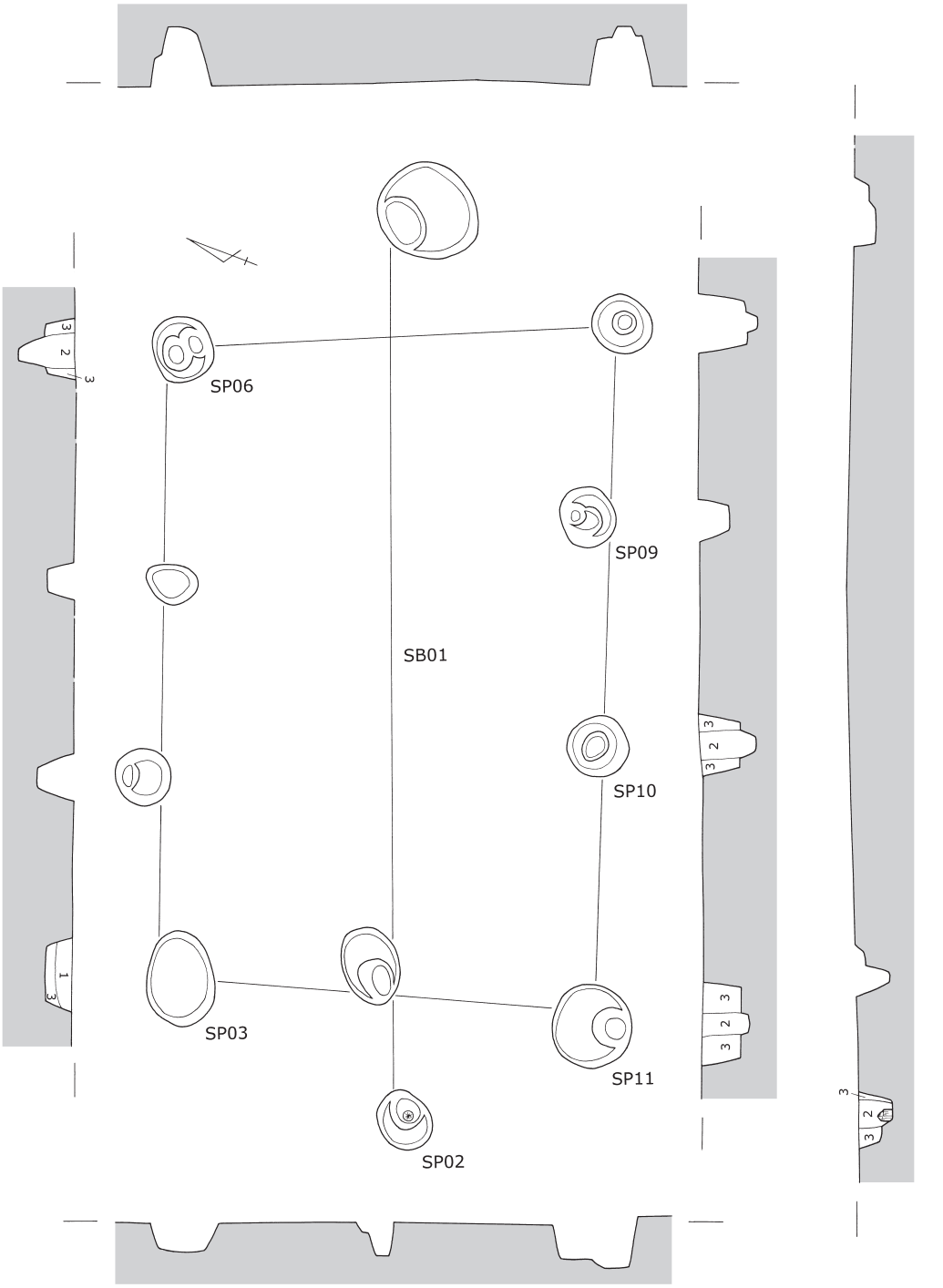
SB06（第25図）　SB06は、調査区北西部で SB05と並んで検出された掘立柱建物である。一部調査区外に広がるが、桁行２間、梁行１間の構造であると推定される。桁行5.1m、梁行2.0m、平面積10.2㎡である。建物の主軸は、ほぼ正南北である。柱穴は円形で、径50～80cm である。柱穴の埋土は、暗灰色粘質土である。柱穴からは、遺物は出土していないが、SB05と主軸が共通しており、建物構造と規模も近いことから、SB05と近い時期の建物であると推定できる。

第２表　掘立柱建物一覧

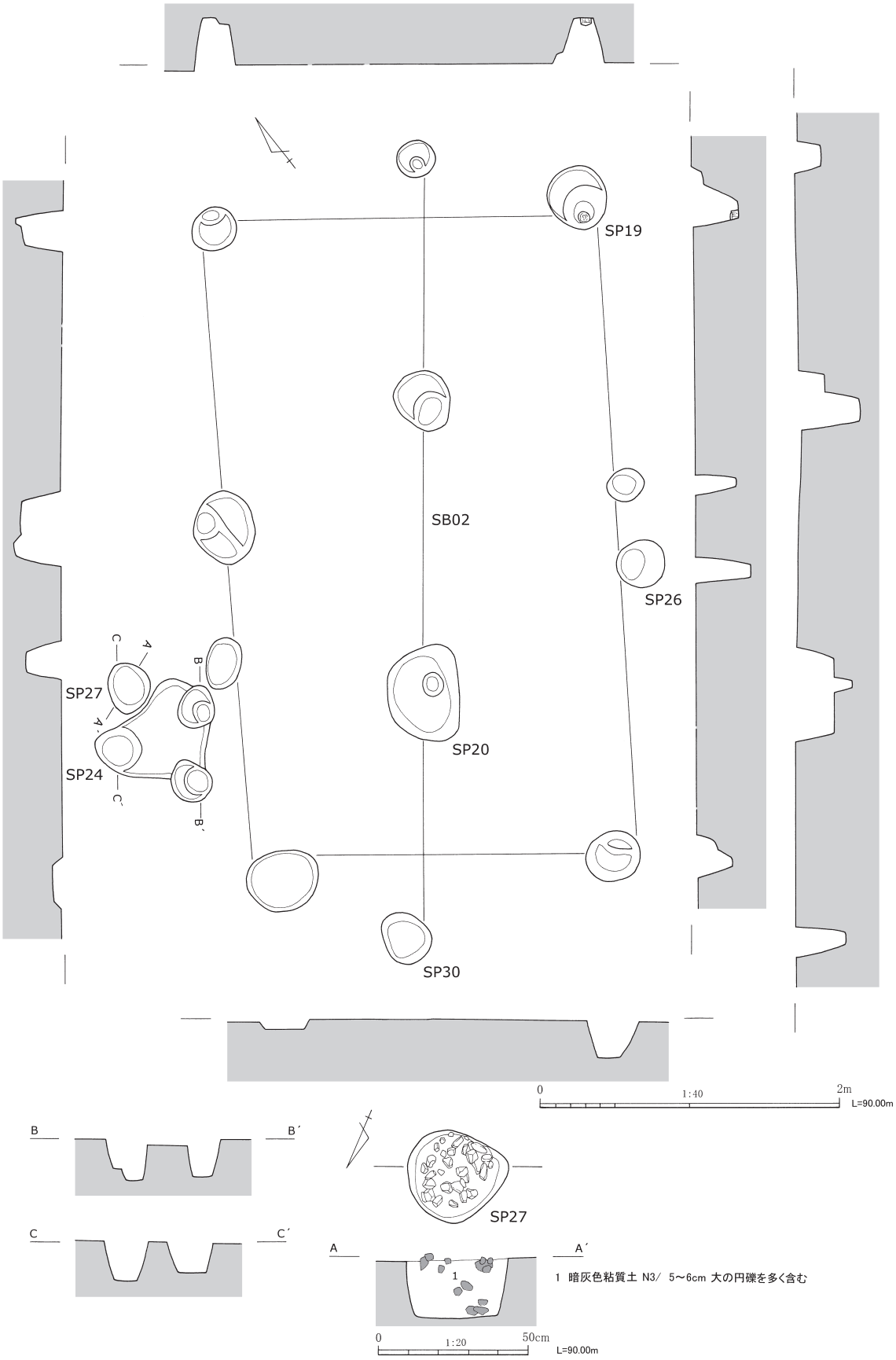
遺構番号	柱配置（桁行×梁行）	建物種類	規模（m）	面積（㎡）	備考
SB01	３間×１間・２間	独立棟持柱付	3.84×2.6	9.98	
SB02	３間×１間	独立棟持柱付	4.3×2.6	11.18	西側に柱穴
SB03	２間×２間	総柱	3.8×3.28	12.47	
SB04	２間×１間	側柱	3.3×3.0	9.9	SE01に伴う
SB05	２間×１間	側柱	4.8×2.3	11	
SB06	２間×１間	側柱	5.1×2.0	10.2	
SB07	２間×１間	側柱	3.46×2.16	7.47	

SB07（第26図）　SB07は、調査区北東部でSA01、SA02と重複して検出された掘立柱建物である。桁行２間、梁行１間の構造である。桁行3.46m、梁行2.16m、平面積7.47㎡である。柱穴は円形で、24cm～60cmである。柱穴の埋土は、暗灰色粘質土である。柱穴からは遺物は出土していない。

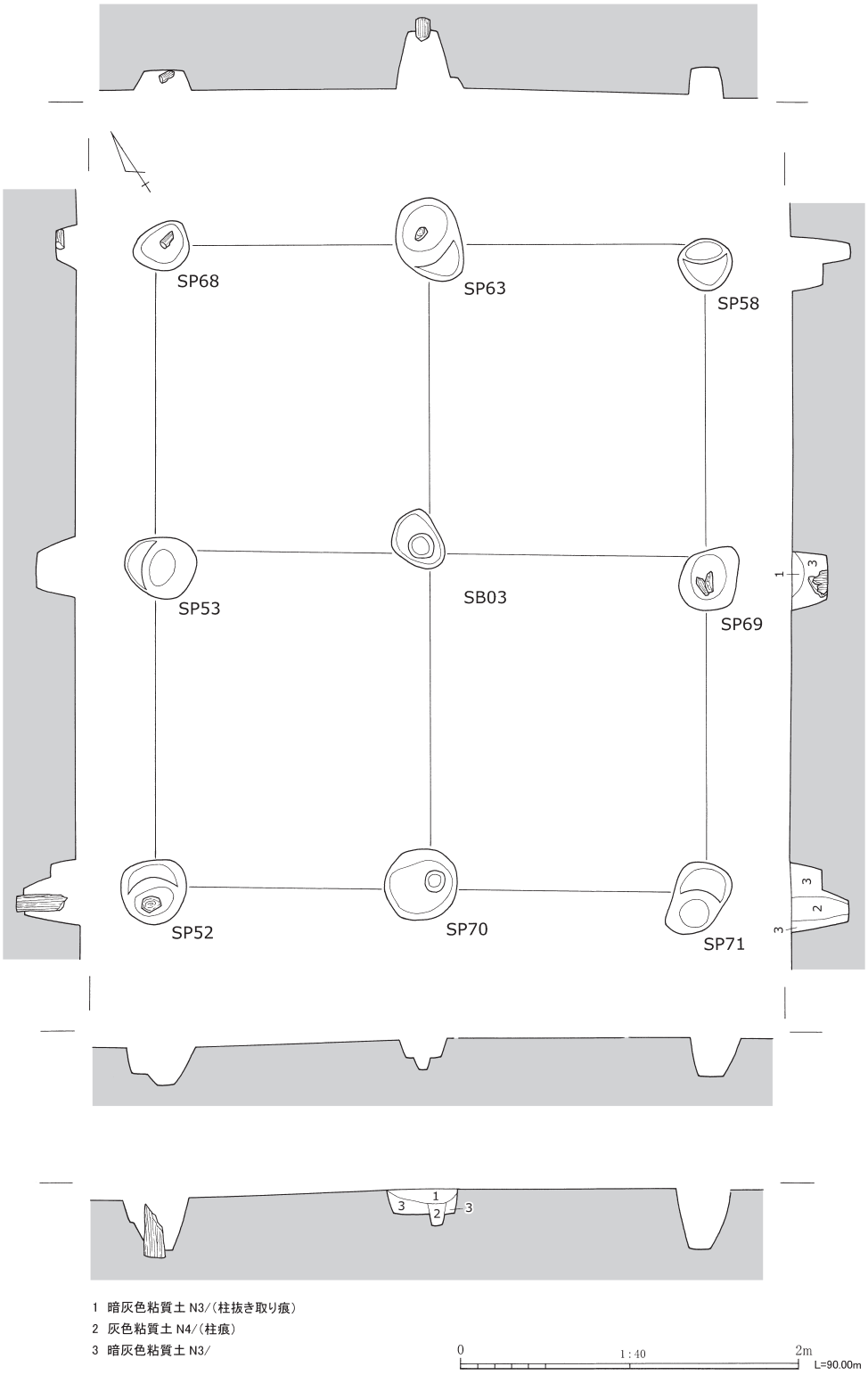
各掘立柱建物の柱穴出土土器をみると、庄内式期から布留式期古段階までの時期幅が認められ、遺構の時期を考えるうえで参考となる。



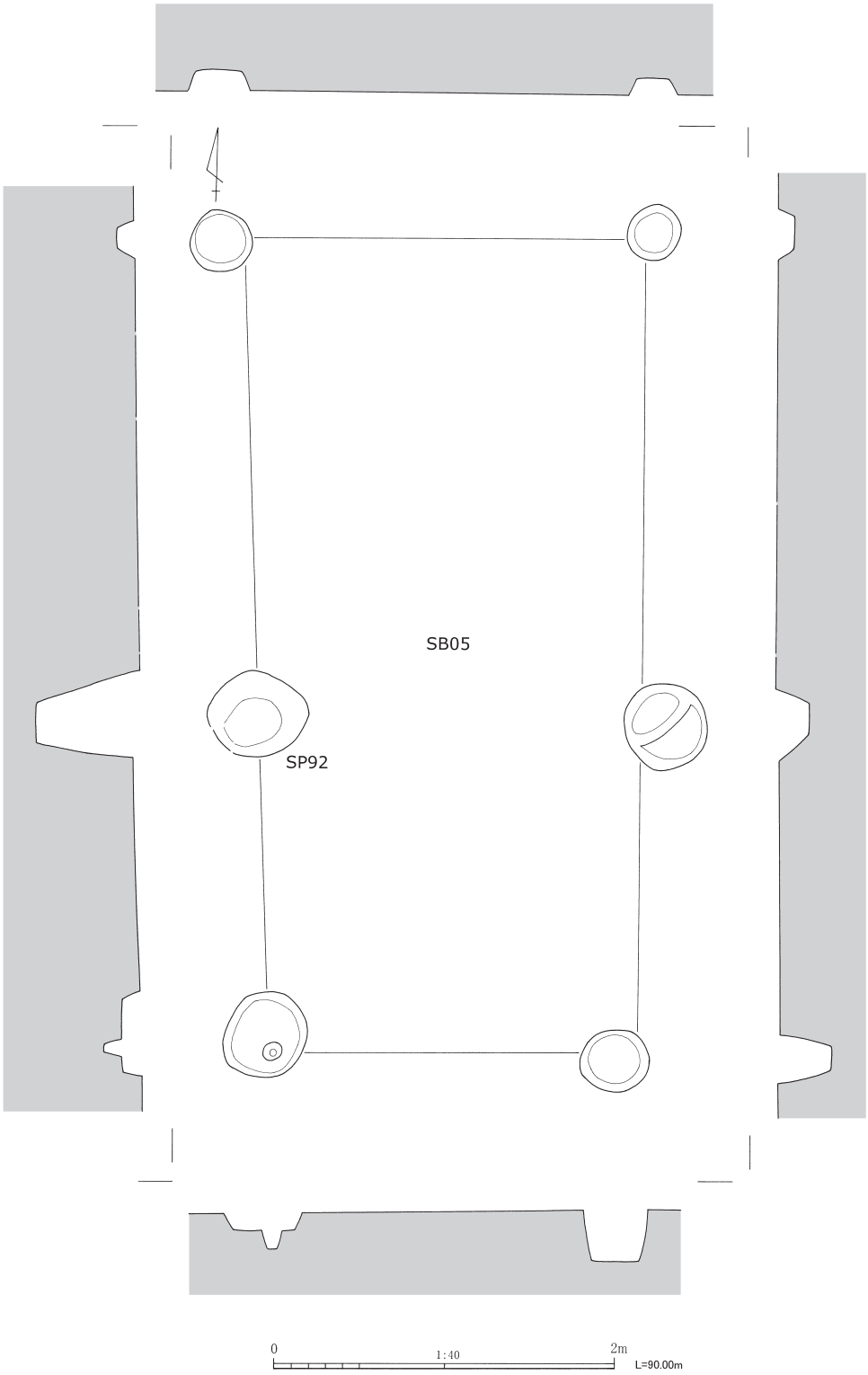
第21図　SB01掘立柱建物



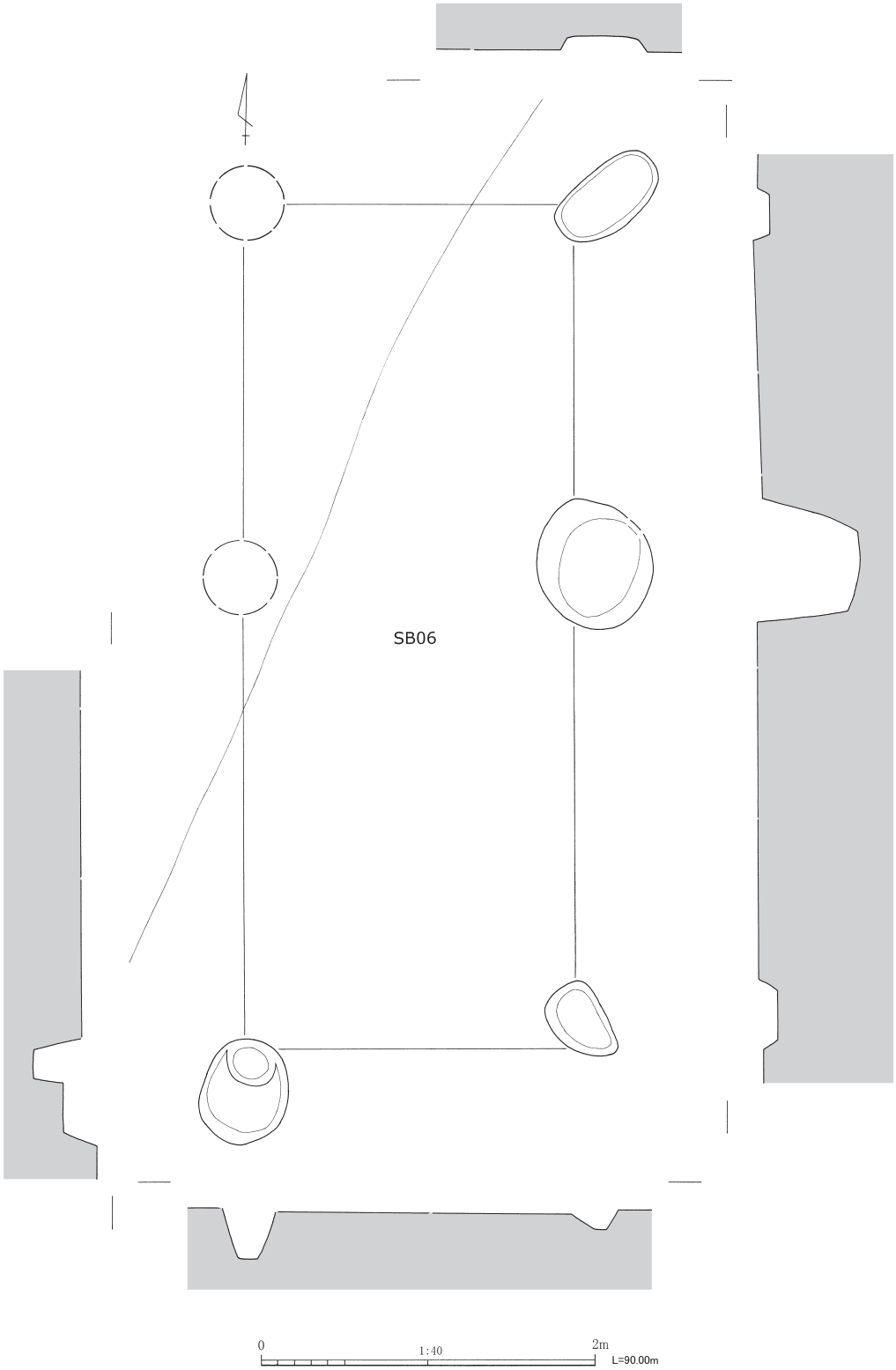
第22図　SB02掘立柱建物



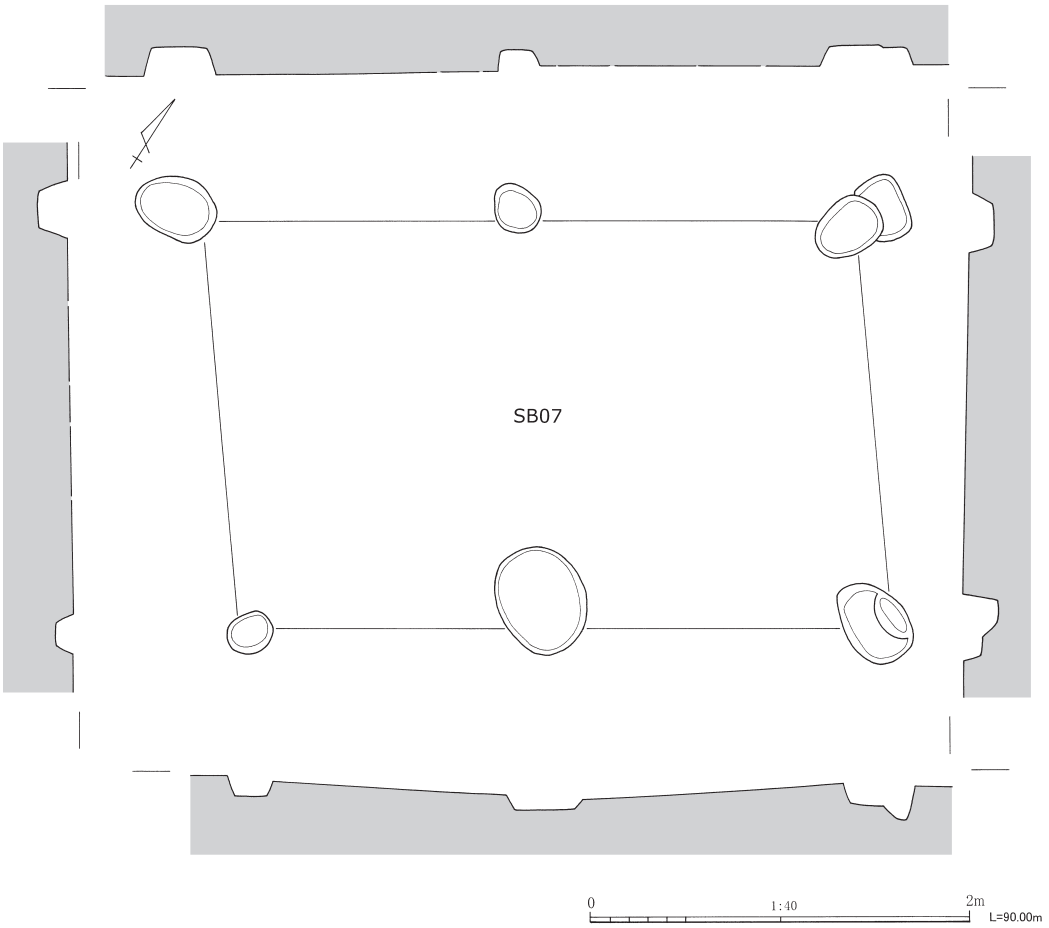
第23図　SB03掘立柱建物

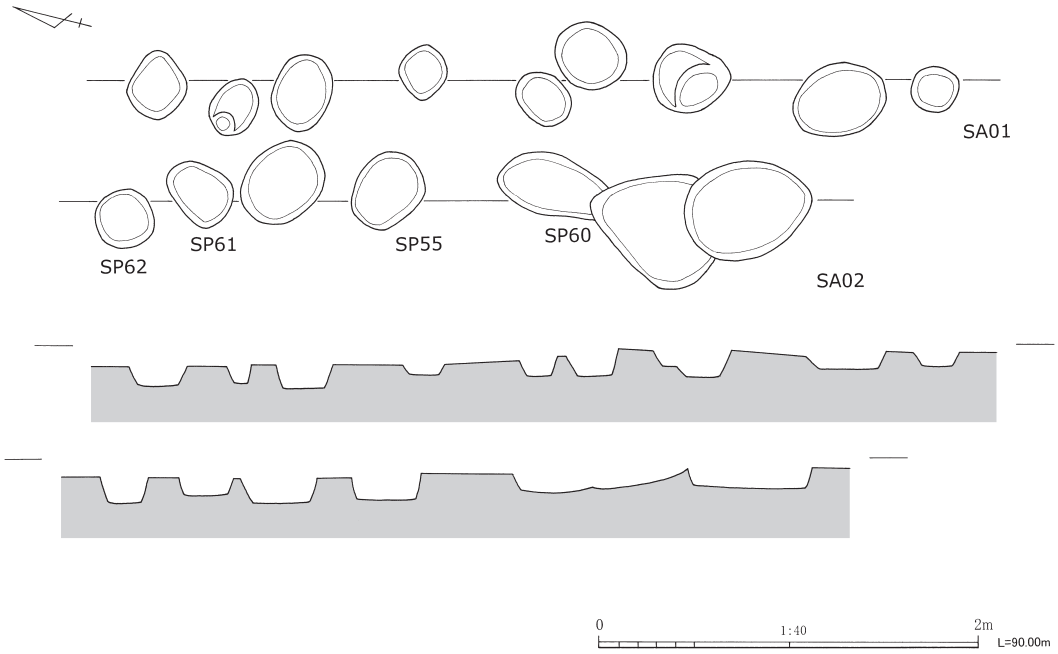


第24図　SB05掘立柱建物

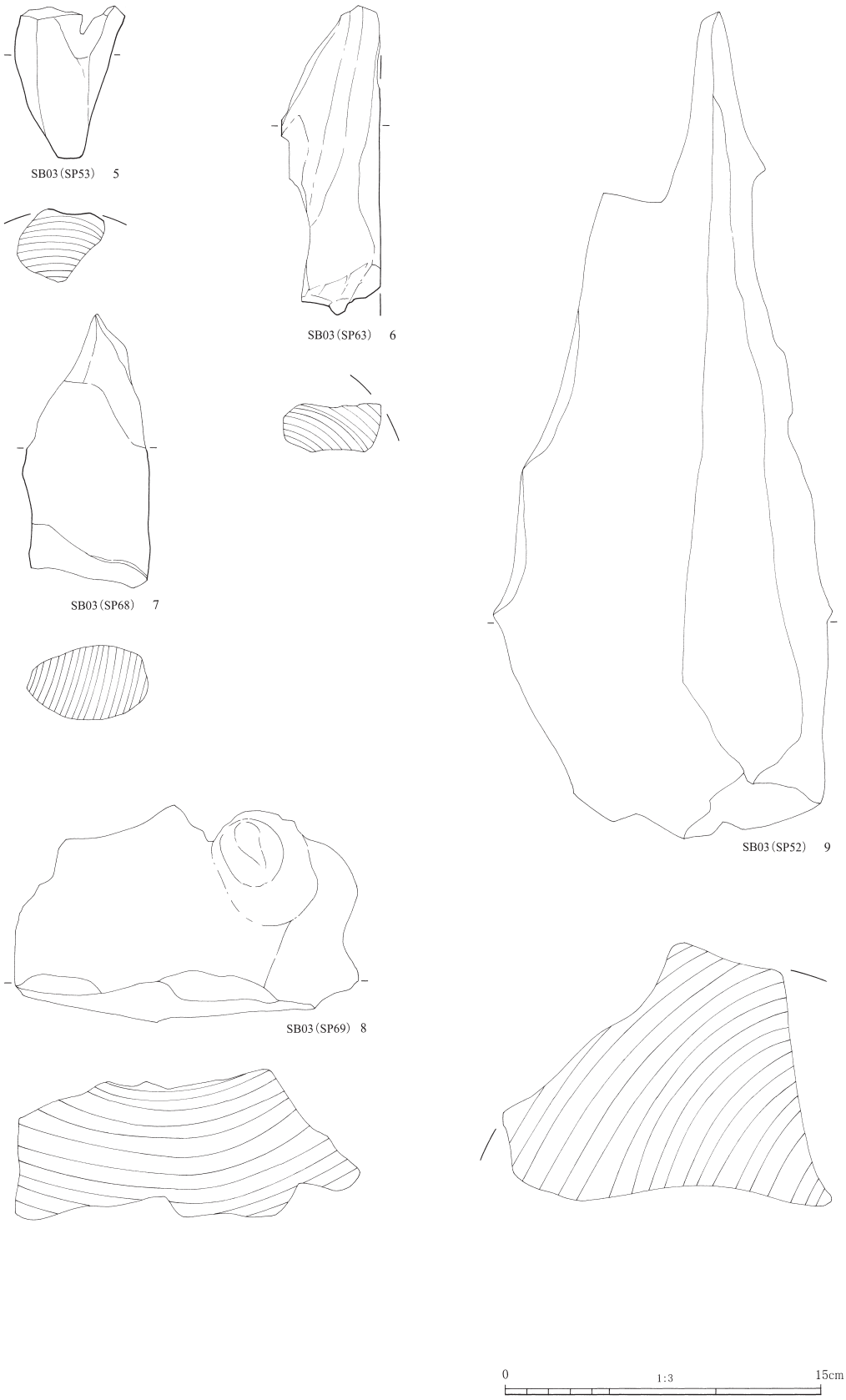


第25図　SB06掘立柱建物





第26図　SB07掘立柱建物・SA01柵・SA02柵



第27図　SB03掘立柱建物　柱根

（3）柵

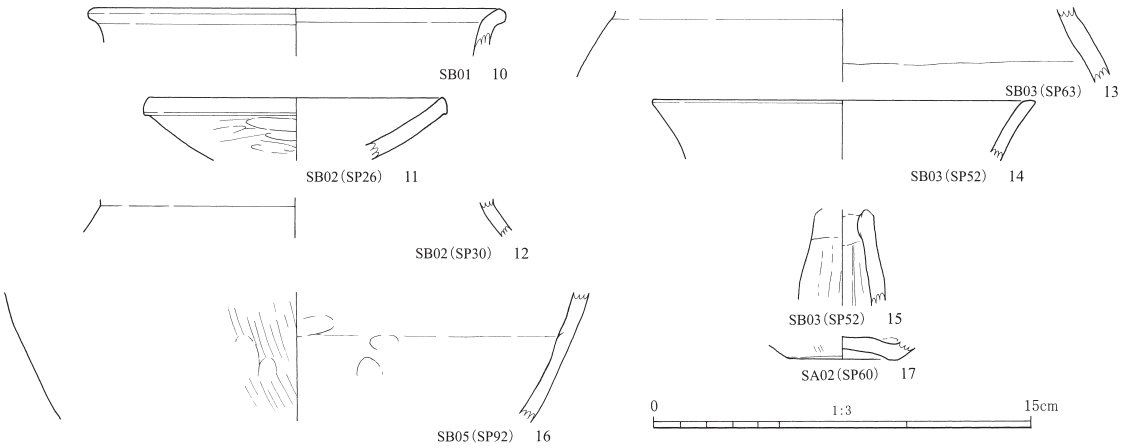
SA01・02・03（第26図）　SA01とSA02は、ともに並列しており、調査区北より中央、落ち込みと土坑群の南で検出された。SB07掘立柱建物と重複している。SB05、SB06の主軸ときわめて近い方向で配置され、両者の関係性が推測される。SA01は4.4m、SA02は3.8mの長さにわたる柵である。柱穴の径は28～68cmで、柱穴の埋土は、暗灰色粘質土である。SA03は、SB01・02の南側で検出された東西方向の柵である。柱間寸法は約2mである。

SA01からは遺物は出土しなかったが、SA02のSP62、SP61、SP55、SP60からは古式土師器片が出土した。ただし、SP60出土土器を除き、小片のために図化が不可能である。17は、SP60出土の甕底部片で、上げ底である。庄内式期の甕に多くみられる底部形態である。

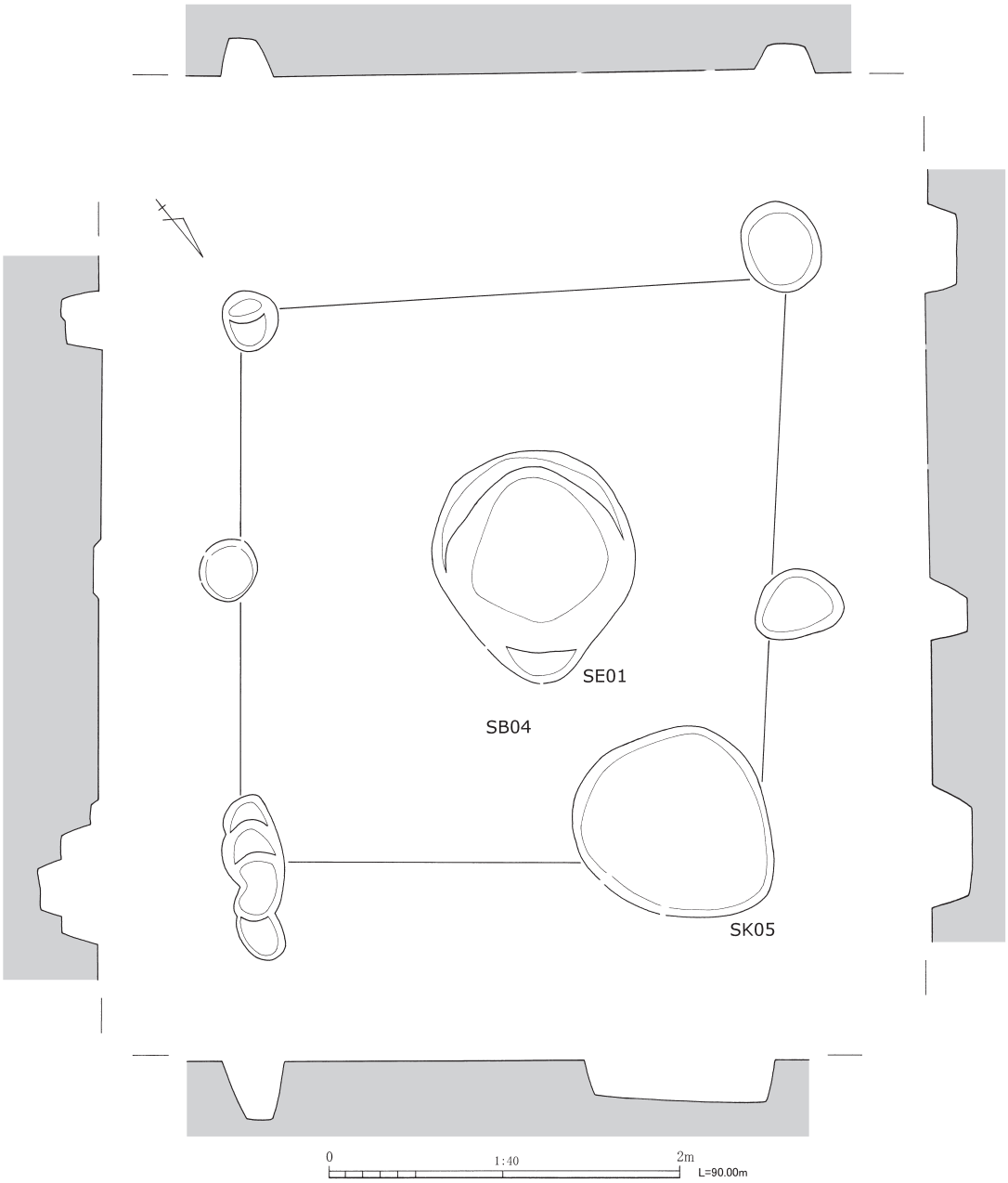
（4）井戸

SB04（第29図）　SB04は、調査区南西部の井戸SE01の覆い屋と推定される掘立柱建物である。2間×1間の構造であると推定されるが、北側の隅柱穴は、SK05土坑にきられている可能性がある。長軸3.3m、短軸3.0m、平面積9.9㎡の規模で、平面形は正方形に近い。柱穴は円形で、40cm前後である。柱穴の埋土は、暗灰色粘質土である。いずれの柱穴からも、遺物は出土していない。

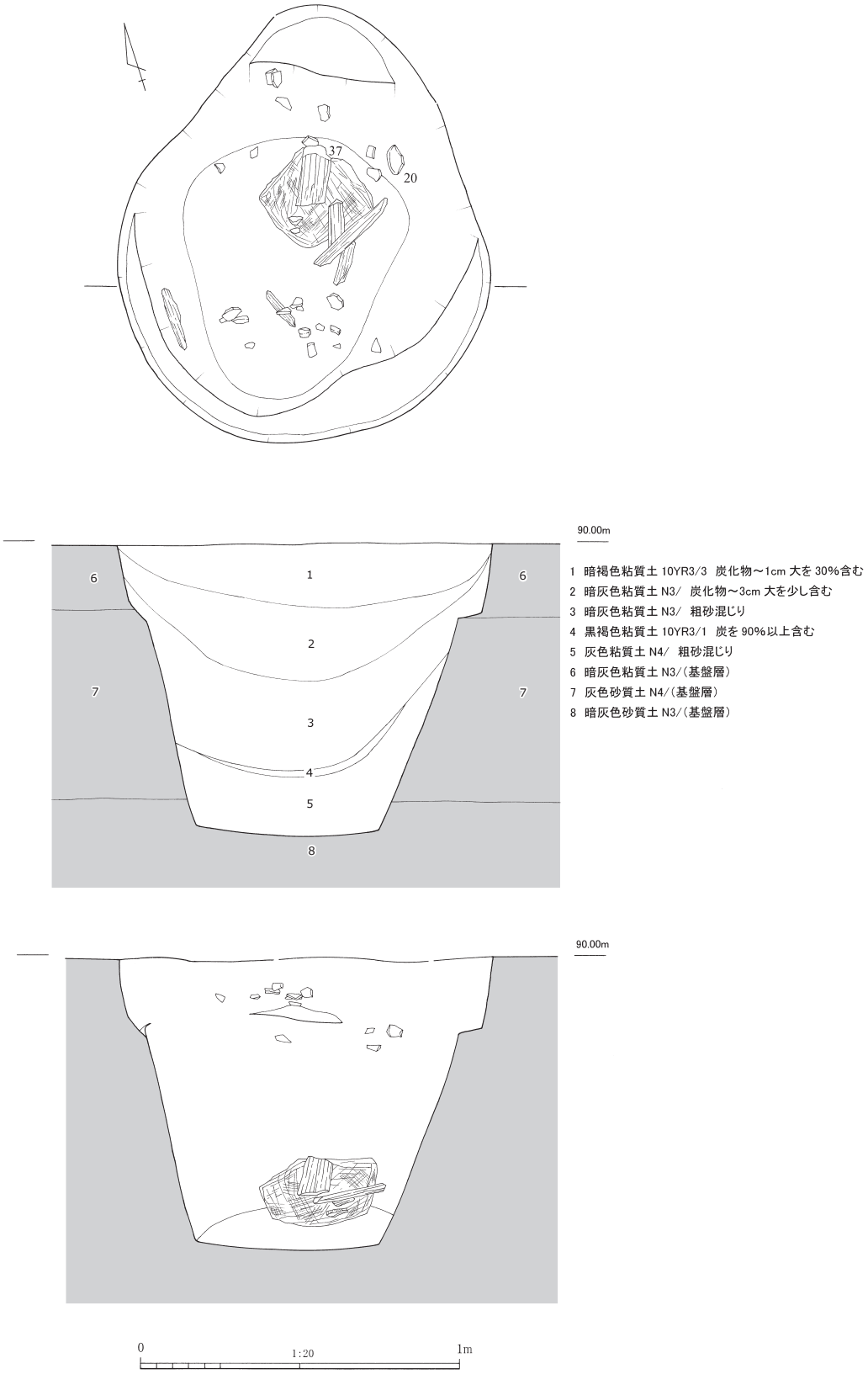
SE01（第30図）　SB04を伴う井戸である。掘方が長さ1.39m、幅1.18m、深さ92cmを測る井戸である。北側がテラス状になってやや張出し、南側にも幅狭のテラスがある。基盤層が砂質土やシルト層に変化する深さまで掘り込まれ、十分に湧水層まで達している。3層（暗灰色粘質土層）と5層（灰色粘質土層）の間には薄くて炭を多く含む4層（黒褐色粘質土層）が挟まれている点に注意される。最下層の5層からは、木製品や井戸枠に転用した可能性のある部材片、茅とみられる植物質が検出され、ヒョウタンの残片と桃核1点が出土した。桃核は、この他にSE01付近の遺構検出面でも1点出土している。このことから、5層は井戸が機能していた頃の堆積層と推定できる。おそらく、炭を多く含む4層は、井戸の廃絶に伴って堆積した層であると推定される。その後、1～3層の堆積が順に進んだのであろう。



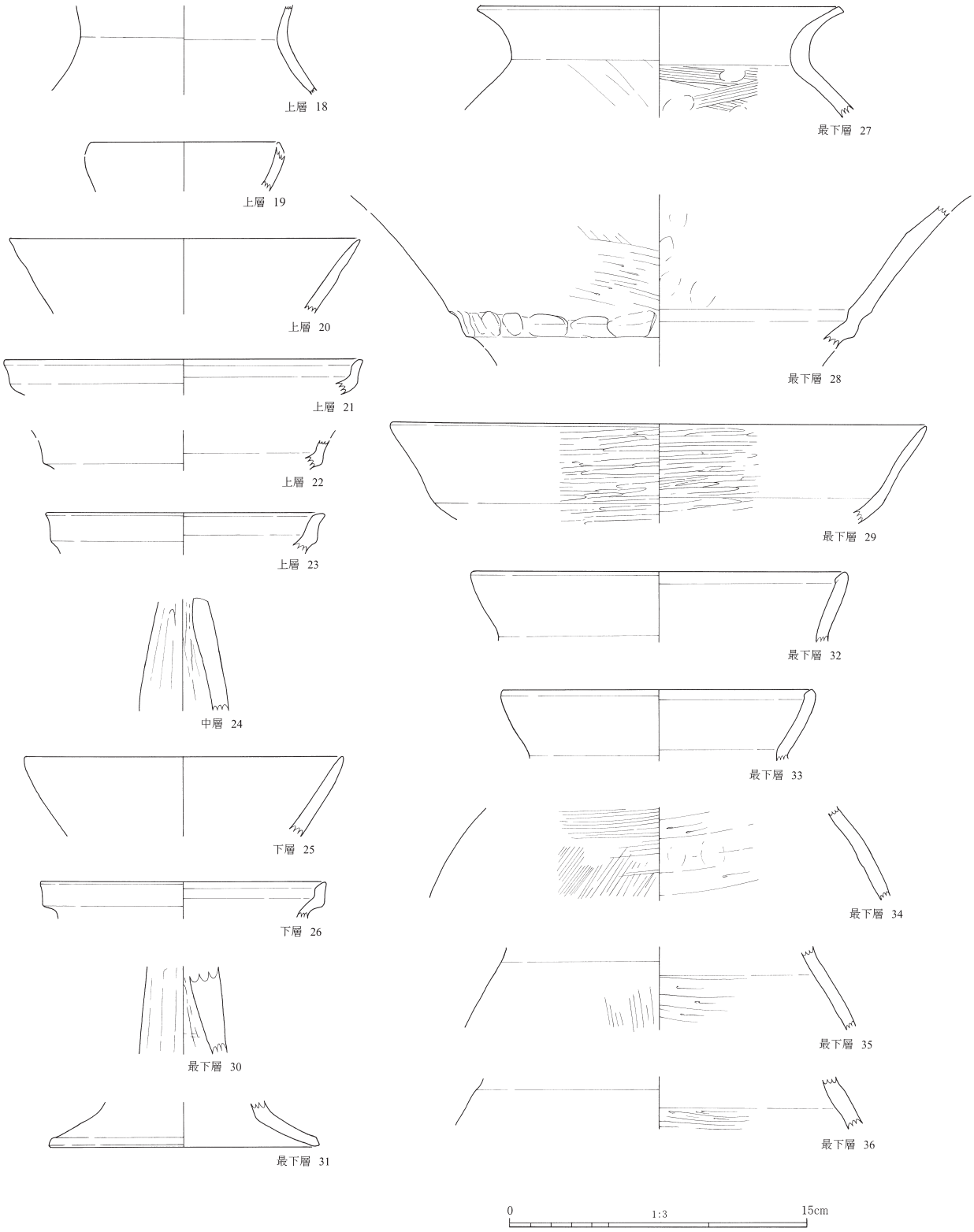
第28図　掘立柱建物・柵出土土器



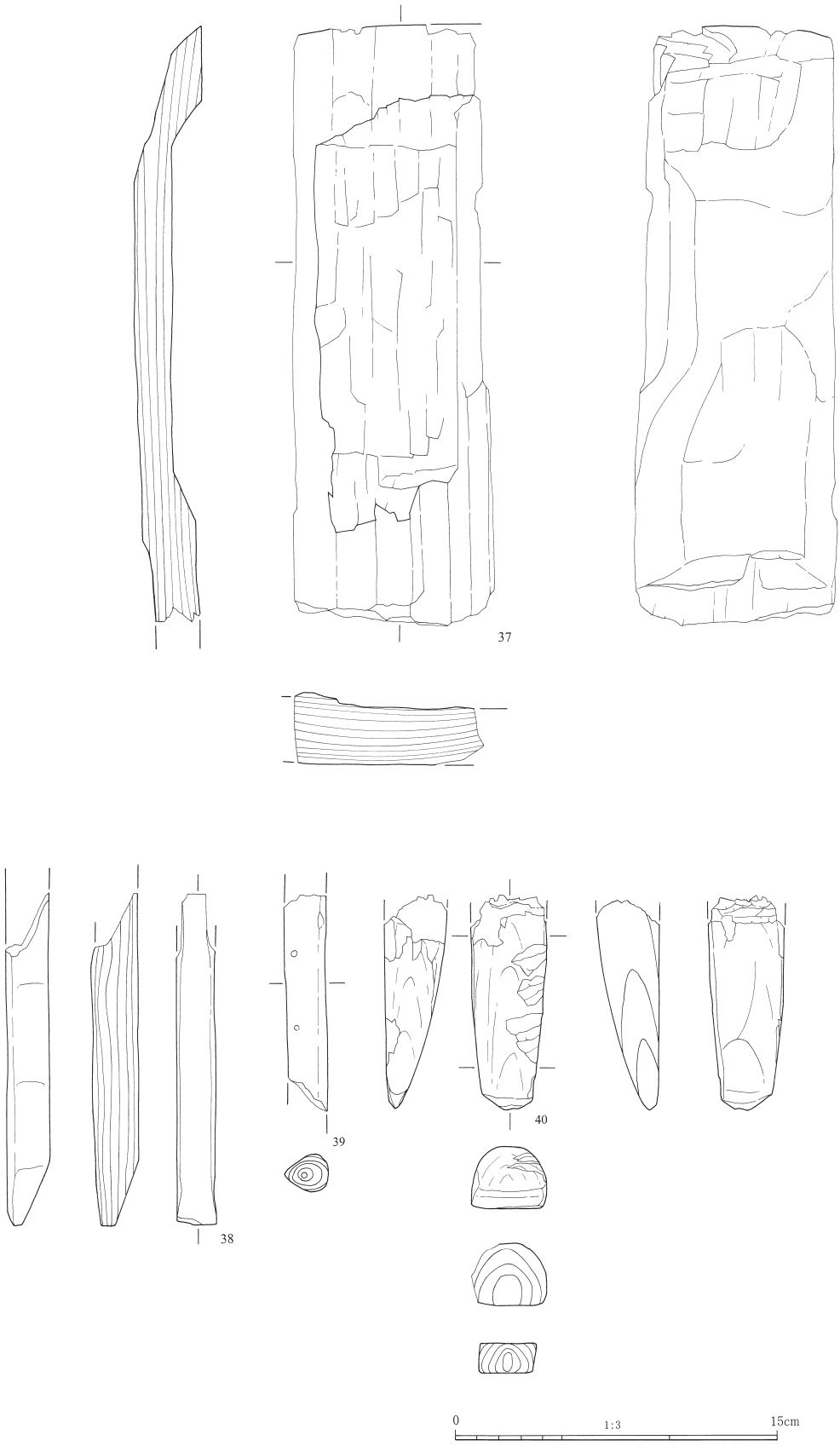
第29図　SB04掘立柱建物・SE01井戸


37
20
90.00m
1
2
3
4
5
6
6
7
7
8
1 暗褐色粘質土 10YR3/3 炭化物～1cm 大を 30%含む
2 暗灰色粘質土 N3/ 炭化物～3cm 大を少し含む
3 暗灰色粘質土 N3/ 粗砂混じり
4 黒褐色粘質土 10YR3/1 炭を 90%以上含む
5 灰色粘質土 N4/ 粗砂混じり
6 暗灰色粘質土 N3/（基盤層）
7 灰色砂質土 N4/（基盤層）
8 暗灰色砂質土 N3/（基盤層）
90.00m
0
1:20
1m

第30図　SE01井戸



第31図　SE01井戸出土土器



第32図　SE01井戸出土木器

土器の出土状態としては、上層の１層と２層、最下層の４層と５層から出土したものが最も多く、わずかに中層の３層上部と下層の３層下部から出土した。上層出土土器は、ある程度の土層の堆積が進んでから、廃棄されたものであろう。

以下、出土土器について記す。18～23は上層出土土器、24は中層出土土器、25・26は下層出土土器、27～36は最下層出土土器である。

18は直口壺の頸部から肩部で、磨滅により調整は不明である。灰色の胎土である。19は、単純口縁の鉢で、磨滅により調整ははっきりしない。20は高坏の坏部で、磨滅により調整は不明である。21・22・23は、甕口縁部片である。24は、高坏の脚部で、外面は縦ミガキ調整である。25は高坏の坏部である。26は甕口縁部である。27は、壺口縁部で、外面の口縁部は強い横ナデ調整、肩部はヘラナデ調整である。内面は頸部から上は強い横ナデ調整で、頸部から下は横ハケの後、指押さえである。28は、二重口縁壺の口縁部と推定される。口縁部外面は斜め方向の弱いヘラ削りで、内面はナデ調整である。屈曲部外面には、突帯が剥離した痕と推定される剥離痕がみえるが、断続的なものである。突帯が剥離したものであるとすれば、もともとどのような突帯がめぐっていたのかは判然としない。にぶい黄橙色という胎土の色調から、在地の土器ではない可能性がある。29は、高坏の坏部で、内外面ともに横ミガキが施される。30は高坏の脚部で、外面縦ミガキ調整である。31は、高坏の脚部で、内外面ともに横ナデの調整である。32と33は甕の口縁部で、端部が肥厚するものである。34・35・36は、甕の肩部である。34は外面が斜めハケの後に横ハケがみられ、内面は横方向のヘラ削り調整である。35は、外面が粗い縦ハケで、内面は横方向のヘラ削り調整である。36は、外面が横ナデで、内面は頸部近くが横ナデ、その下は横方向のヘラ削り調整である。

最下層の土器をみると、庄内式期の土器も含まれるが、二重口縁壺（28）、くの字口縁甕（32・33）、内面ヘラ削り調整の甕（34・35・36）、高坏（30・31）は、布留式期古段階に下るものであろう。このことから、井戸は庄内式期から機能し、布留式期古段階の時期に機能を終えて埋没している可能性が高い。

37～40は、最下層である５層から出土した木器である。37は、容器の残片で、槽であると推定される。残存長28.5cm、残存幅9.0cm、厚さは刳りぬかれた凹部で1.8cm、端部で3.3cmである。外面、内面ともに加工痕が明瞭に観察できる。縦方向に切断されており、井戸枠などに転用されたものかもしれない。38は棒状木製品で、残存長15.9cm、幅2.0cm、厚さ2.1cmを測る。側面には加工痕がみられ、一方の欠損していない端部には面取りが行われる。39は、棒状木製品である。断面形が楕円形で、両面から２mm大の穿孔箇所がある。残存長10.2cm、厚さ1.8cm～2.2cmである。40は、袋状鉄斧の膝柄の先端部と推定される。残存長10.0cm、残存幅3.5cm、根元部分で厚さ2.9cmを測る。袋状鉄斧を直接装着する部分に位置するものであろう。先端部の幅は2.4cmで、少し丸みをもってとがる。横断面の形は、根元部分では蒲鉾形で、先端部は四角形である。平らな面が柄の上部に位置し、袋状鉄斧の閉じ合わせ部に対応する可能性がある。二次加工を受けており、廃棄する際、あるい

は何かに転用する際に受けたものであろう。鉄斧の使用を雄弁に物語るものとして、注目できる。この他にも、図化していないが、熱を受けて黒化した長さ20～30cm 程度の棒状ないし板状の木片が出土し、井戸枠の残骸である可能性がある。

（5）小　結

独立棟持柱建物を含む掘立柱建物、柵、井戸、青銅器の鋳造に関わる工房とみられる竪穴建物、土坑群が検出され、各遺構の時期は庄内式期から布留式期古段階であることが明らかになった。集落の北端部にあたる第２次調査区は、重要な建物や施設が集まる特殊な区域であることが考えられる。

参考文献

植田　文雄　1988「古式土師器の編年」『斗西遺跡』能登川町埋蔵文化財調査報告書第10集　能登川町教育委員会

植田　文雄　1994「近江湖東地域の庄内～布留式併行期の土器編年」『庄内式土器研究』Ⅷ　庄内式土器研究会

近藤　広　2011「下鈎遺跡の調査―大型掘立柱建物と周溝付建物」『第14回近畿弥生の会発表資料』　近畿弥生の会

中居　和志　2010「古墳出現前後の近江地域―土器編年を中心に―」『立命館大学考古学論集Ⅴ』　立命館大学考古学論集刊行会

奈良国立文化財研究所　1985『木器集成図録　近畿古代篇』　奈良国立文化財研究所史料第27冊

水村直人・君嶋俊行ほか2011『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告６金属器』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告39　鳥取県埋蔵文化財センター

栗東歴史民俗博物館　2014『大型建物出現の背景―近江の弥生集落を中心に―』調査研究報告会発表資料

第３章　総　括

１　稲部遺跡における縄文時代の集落

（１）愛知川流域における縄文時代集落の様相

稲部遺跡では、竪穴建物が検出され、縄文時代後期の土器が出土したことにより、縄文時代後期の集落が営まれていたことが判明した。東近江市域となる愛知川左岸における縄文時代後期の集落の状況をみると、湖岸に近い石田遺跡で縄文時代後期の不整円形の竪穴建物１棟が検出され、埋設土器２基が建物内に伴っている（能登川町教育委員会1995・2005）。石田遺跡よりも内陸に位置する今安楽寺遺跡では、縄文時代後期に位置する一辺約４ｍで、不整方形の竪穴建物１棟が検出されている（能登川町教育委員会1990）。また、今安楽寺遺跡の近くに位置する正楽寺遺跡では、縄文時代後期の不整円形プランの竪穴建物５棟が検出され、縄文時代後期の大規模集落と目されている（能登川町教育委員会1996）。湖岸近くの氾濫平野において、石田遺跡とやや内陸の正楽寺遺跡・今安楽寺遺跡が併存している格好である。

愛知川左岸では当該期の集落がいくつか確認されていたが、旧愛知川である文禄川・来迎川流域においても縄文時代後期の集落が営まれていることがわかったことは重要である。一方、文禄川以北、宇曽川以南では、荒神山南麓の屋中寺廃寺遺跡で縄文時代中期後半の土器が出土し、この時期の活動の痕跡が認められるが、縄文時代後期の様相は不明である。

（２）今後の課題

今後の調査では、周辺部においても竪穴建物が存在している可能性があり、注意する必要がある。また、隣接する稲部西遺跡の第１次調査区では、縄文時代晩期の凸帯文土器が出土しており、集落が縄文時代後期から晩期へ継続する可能性もあり、今後の課題である。文禄川・来迎川流域における縄文時代集落の解明が進むことに期待したい。

参考文献

小島孝修　1998「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き―地域の検討２．湖東南部地域―」『紀要』第11号　財団法人滋賀県文化財保護協会

瀬口眞司　1998「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き―地域の検討１．湖東北部地域―」『紀要』第11号　財団法人滋賀県文化財保護協会

能登川町教育委員会　1990『今安楽寺遺跡』能登川町埋蔵文化財調査報告書第17集

能登川町教育委員会　1995『林・石田遺跡』能登川町埋蔵文化財調査報告書第36集

能登川町教育委員会　1996『正楽寺遺跡』能登川町埋蔵文化財調査報告書第40集

能登川町教育委員会　2005『石田遺跡』能登川町埋蔵文化財調査報告書第58集

2　稲部遺跡における弥生時代終末期から古墳時代前期の掘立柱建物群

（1）はじめに

1981年に行われた第1次調査では、庄内式から布留式古段階までの古式土師器が多数出土したが、建物跡などの遺構は検出されず、集落の状況は不明瞭であった。今回の第2次調査では、独立棟持柱建物を含む掘立柱建物、柵、井戸、青銅器の鋳造に関わる工房とみられる竪穴建物、土坑群が検出され、各遺構の時期は、庄内式期から布留式期古段階の間にほぼおさまることが明らかになった。これにより、集落の北端部の様子が一部明らかになるとともに、彦根市域における弥生時代終末期から古墳時代前期の集落においては、重要な遺構をまとまったかたちで理解できるはじめての事例となった。今回の調査区部分は、独立棟持柱建物、総柱建物、井戸、工房、多数の土器を廃棄した土坑群が集まり、集落のなかでも祭祀や特殊な生産に関わる中枢部に相当する可能性が高い。

ここでは、第2次調査で検出された掘立柱建物群の時期と性格についての予察を行い、現状の見解を述べておきたい[(1)]。

（2）掘立柱建物の時期認定

遺構の時期を認定するにあたっては、原則として出土土器により行うべきであるが、掘立柱建物については土器の出土が乏しく、大半が小破片である。そのため、①柱穴出土土器、②建物の重複関係、③隣接する井戸、土坑、溝などとの位置関係、④掘立柱建物出土の柱根、⑤掘立柱建物の平面形態と主軸方位、という5つの認定基準で検討することにより、掘立柱建物の時期認定を行った。

（3）掘立柱建物群の変遷

Ⅰ・Ⅱ期　桁行と中心軸の柱構造が異なるものの、規模の近い独立棟持柱建物SB01とSB02が築かれる。両者ともに一部の柱根が残るが、主軸方位が少しずれる。どちらか一方が先に建てられて廃絶した後に、これとは別のどちらか一方が建て替えられたものと考えられる。後述するように、SB01→SB02の前後関係を想定している。ただし、その経過のなかでのSB01とSB02の同時併存の時期が全くなかったことを否定するものではない。SB02の西側には覆い屋を伴う井戸SB04・SE01が設置されている。その北側では、総柱の掘立柱建物SB03が築かれる。SB03とSB01・SB02の間には、青銅器の鋳造に関わる工房跡とみられる竪穴建物SH01が位置している。SB03のさらに北側では、SB01と主軸の近いSB07が位置する。SB07とSB03とは近い位置関係にあり、わずかな時期差も見込まれるが、柱根の残り具合から、SB03の方が若干新しい可能性が考えられる。

また、SB02・SB03・SB04は、調査区の北側を東西に流れる文禄川の自然流路と平行する位置関係にあり、刻々と変化する自然流路の流れに規制されて建てられている可能性がある。一方、SB01・SB07は、西に隣接する稲部西遺跡の自然流路の流れと平行し、同様に流

路との関係に注意する必要がある。

SB01とSB02、SB03とSB07では、若干の時期差が想定されるところであり、建物の重複関係、主軸方位、柱根の残存状況から、その他の建物との関係も含めて考えると、Ⅰ期：SB01・SB07・(SH01)・SA03→Ⅱ期：SB02・SB03・SB04・SE01・(SH01)・SA03という2時期の変遷を想定できる。ただし、これらの時期差による掘立柱建物群の構造の差異は、続くⅢ期の掘立柱建物群の構造との違いよりも度合いが小さいものであると推測される。Ⅰ期とⅡ期の時期差を出土土器から割り出すことは現状では難しいが、Ⅰ期からⅡ期にかけては、庄内式期新段階から布留式期初頭を中心とする時期と考えておきたい。また、SB01とSB02の南で検出されたSA03は、SB01・02に伴う可能性があり、注目できる。

Ⅲ期　調査区北端部において並列するSB05・SB06が築かれる。両者の主軸は真北に近く、これらと主軸が共通する柵SA01・SA02がSB07をきって設置される。出土土器から、井戸SB04・SE01がこの段階で埋没していたことが推定できる。これに伴い、Ⅰ期・Ⅱ期に機能した掘立柱建物群SB01・SB02・SB03・SB07と竪穴建物SH01もⅢ期には廃絶している可能性が高い。布留式期古段階にほぼ相当する時期であると推定される。

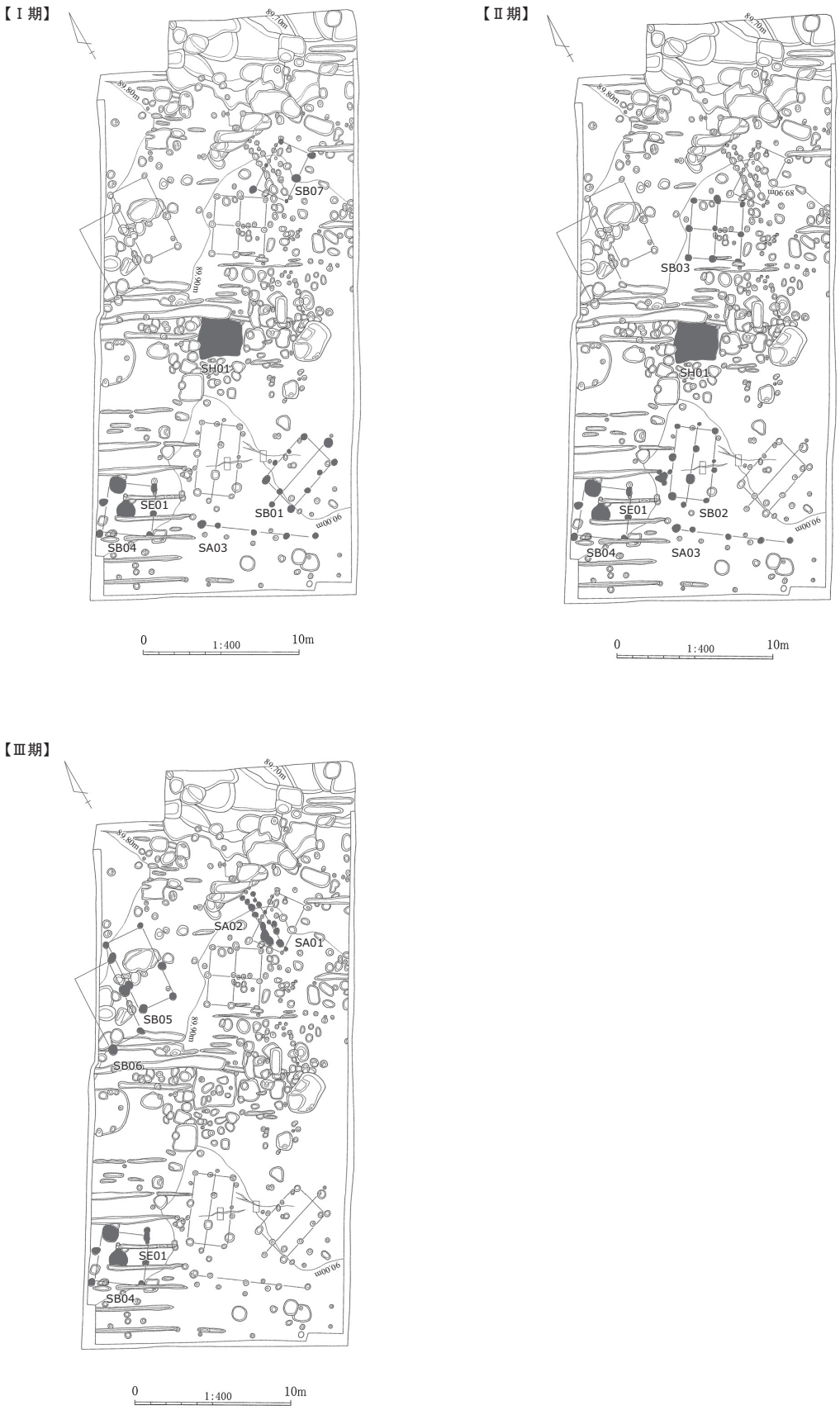
（4）掘立柱建物群の性格

Ⅰ・Ⅱ期　独立棟持柱建物SB01（9.98㎡）・SB02（11.18㎡）が祭祀や儀礼に関わる建物である可能性が高いと考えられる。隣接するSB04（9.9㎡）・SE01は、覆い屋がSB02・SB03とも方位を同じくするなど、規格に則っており、祭殿を設けて恒常的に井水に対する祭祀が行われていたものと推定される。井戸からは桃核と瓢箪が1点ずつ出土し、井戸周辺の遺構検出面でも桃核1点が出土している。SB01・SB02・SB04の北では、総柱構造の建物SB03（12.47㎡）が位置し、規模や周辺の状況から、居住用建物ではなく、倉庫的な機能をもち、SB01・SB02とともに一体となって機能していたと考えられる。

SB07とSB03の北では、現在の文禄川である自然流路に向かって地形の落ち込みがあり、落ち込みの際には多数の土器が廃棄された土坑群が密集している。土坑群と出土土器については、来年度以降の報告に委ねるが、土坑群からは庄内式期から布留式期古段階にかけての土器が出土している。このことから、SB07（7.47㎡）は、SB03とともに祭祀に関連する施設で、定期的に水辺の祭祀が執り行われていたものと考えられる。

さらに、SB01・SB02・SB04・SE01とSB03・SB07の間には、炭を含む小穴を伴う平面方形の竪穴建物SH01が位置する。SH01及び関連遺構・遺物については、来年度以降に報告予定であるが、付近で連鋳式銅鏃の端部とみられる棒状青銅製品が出土するなど、青銅器鋳造などの金属器生産に関わる工房跡とみられる。

このように、庄内式期新段階から布留式期初頭には、集落内の機能分化が発達し、祭祀を執り行う施設を中心に倉庫などの付属建物や井戸が存在し、工房施設も存在していることがわかる。祭殿が設けられ、井水の祭祀や水辺の祭祀が執り行われていたのであろう。中枢部と目される祭祀空間の存在は明らかになったが、周辺の区画施設や首長の居住空間の有無に



第33図　弥生時代終末期から古墳時代前期における掘立柱建物の変遷

ついては不明瞭な点があり、今後の調査の大きな課題である。ただし、SB01とSB02の南で検出されたSA03は注目され、祭祀空間の南側を区画する柵である可能性があり、南側の隣接地の状況が問題となろう。

Ⅲ期　出土土器はないが、遺構の重複関係と主軸方位からほぼ布留式期古段階に相当する時期であると推定されるSB05（11.0㎡）・SB06（10.2㎡）が注目される。これらには、主軸が共通する柵SA01・SA02が伴う。現状では建物の性格ははっきりしないが、Ⅰ期・Ⅱ期とは異なる集落構造へ変化している可能性があり、周辺部の調査をふまえて検討する必要がある。

このように、第２次調査区は、稲部遺跡の中枢部に位置していると考えられる。

近江では、弥生時代後期中葉から後半にかけて湖南地域の伊勢遺跡において、求心構造をもち、独立棟持柱建物からなる祭祀空間が設定されている。弥生時代後期後半には、湖南地域の下鈎遺跡、湖西地域の針江川北遺跡で独立棟特性建物を配した祭祀空間が想定されている。また、湖北地域の天野川流域の黒田遺跡、湖西地域の針江川北遺跡、湖南地域の野洲川流域の下長遺跡、十里遺跡において庄内式期から布留式期にかけての独立棟持柱建物を配した祭祀空間の存在が明らかになっているが、湖東北部地域の稲部遺跡においても当該期の祭祀関連施設が確認された意義は大きい。稲部遺跡は、愛知川流域における中核的な集落であるとみなせる。しがしながら、稲部遺跡の様相は、限定された範囲の知見にとどまっており、今後の調査によるところが大きい。

（５）今後の課題

微視的な視点では、第２次調査区で確認された中枢部の南側においては、竪穴建物を中心とした居住域が広がることが第３次調査によって明らかになっており、今後の調査では、第２次調査で検出された中枢部の祭祀域と対応する首長の居館域の有無、中枢部に対応する居住域の特定、遺構の性格と分布の関係、遺跡の広がりが問題となる。そして、稲部遺跡の西に隣接する稲部西遺跡の第１次調査では、稲部遺跡と近い時期と想定される居住域が確認されている。多角形竪穴建物、周溝付建物、掘立柱建物で構成され、多角形建物は周溝付建物にきられているため、時期差があると考えられる。多角形竪穴建物、周溝付建物が配置されるエリアが比較的はっきりしている点は注目することができ、稲部遺跡と稲部西遺跡で検出された遺構について、相互に関連のある遺構群として、あわせて集落の構造を検討する必要があろう。

また、文禄川に面する落ち込み部分とその南側で検出された土坑群からは、廃棄された古式土師器が豊富に出土しており、土器編年上の基準資料になりうる土器群も含まれる。地域史を語る資料として、これらの土器と検出した遺構の特徴を明らかにするとともに、集落の変遷と文禄川流域において稲部遺跡・稲部西遺跡が出現した意義を検討する作業については、今後の調査と報告における課題としたい。

旧愛知川の支流である文禄川・来迎川流域として考えると、庄内式期では、湖岸近くに普

光寺廃寺遺跡の集落があり、布留式期としては芝原遺跡の集落が知られているが、これらの集落及び愛知川の対岸に位置する大規模集落である斗西・中沢遺跡群との関係が今後問題となろう。

参考文献

近江町教育委員会　1994『黒田遺跡３』近江町文化財調査報告書第17集

近藤　広　1995「集落内祭祀と集落の企画性―近江の独立棟持柱付建物をもつ集落の検討―」『滋賀考古』第14号　滋賀考古学研究会

近藤　広　2001「独立棟持柱付建物をもつ首長居館の一形態―針江川北遺跡の検討―」『花園大学考古学研究論叢　花園大学考古学研究室20周年記念論集』　花園大学考古学研究室

近藤　広　2003「滋賀県（下之郷遺跡・伊勢遺跡・下鈎遺跡）」『日本考古学協会2003年度滋賀大会研究発表資料』　日本考古学協会2003年度滋賀大会実行委員会

彦根市教育委員会　1982『稲部遺跡発掘調査概要報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告第３集

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1995『普光寺廃寺・屋中寺廃寺』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1997『芝原遺跡』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1998『普光寺廃寺遺跡発掘調査報告書』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1998『屋中寺廃寺遺跡』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　2010『十里遺跡』主要地方道草津守山線（十里）緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書２

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　2010『肥田城遺跡・肥田西遺跡・鶴田遺跡』

清水　尚　1992「針江遺跡群にみる弥生時代集落の特質」『針江北遺跡・針江川北遺跡（Ⅰ）』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

都出比呂志　1993「古墳時代首長の政治拠点」『論苑考古学』　天山舎

寺沢　薫　1998「古墳時代の首長居館―階級と権力行使の場としての居館―」『古代学研究』第141号　古代学研究会

寺沢　薫　2001「首長居館論追補―八王子遺跡の古墳時代前期初頭遺構に寄せて―」『八王子遺跡　考察編』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集　財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター

細川修平　2006「近江における弥生時代の集落研究の現状と課題」『人間文化』19号　公立大学法人滋賀県立大学人間文化学部

細川修平　2013「山の集落・湖の集落―古墳時代開始期の集落関係―」『紀要』第26号（公財）滋賀県文化財保護協会

森岡秀人　2003「近畿の様相」『日本考古学協会2003年度滋賀大会研究発表資料』　日本考古学協会2003年度滋賀大会実行委員会

守山市教育委員会　2001『下長遺跡発掘調査報告書Ⅷ』守山市文化財調査報告書

守山市教育委員会　2010『下長遺跡発掘調査報告書』守山市文化財調査報告書

註

（1）平成26年6月9日～6月13日にかけて奈良文化財研究所において行われた文化財担当者専門研修「建築遺構調査過程」では、林良彦氏、箱崎和久氏、鈴木智大氏から稲部遺跡第2次調査・稲部西遺跡第1次調査で検出された掘立柱建物について有益なご教示を賜った。また、森岡秀人氏、細川修平氏、北原治氏からは掘立柱建物群や当該期の集落像について貴重なご意見・ご教示を賜った。

第３表　出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	細別	残存率（%）	反転図化	器径幅（cm）	器高長さ（cm）	口径厚さ（cm）	色調
1	SH03	縄文土器	深鉢	20	○	31.5		33.1	外面：淡黄色・黄灰色　内面：暗灰黄色・浅黄色
2	SP32	縄文土器	鉢	5	○			26.6	外面：にぶい黄橙色　内面：灰白色
3	SP31	縄文土器	深鉢	5					外面：褐灰色　内面：灰白色
4	SP36	縄文土器	深鉢	5					外面：にぶい黄橙色　内面：浅黄橙色
5	SB03（SP53）	木製品	柱根			4.6	7.6	5	
6	SB03（SP63）	木製品	柱根			4.8	14.6	4.7	
7	SB03（SP68）	木製品	柱根			5.8	13.2	5.5	
8	SB03（SP69）	木製品	柱根				10.2	15.6	
9	SB03（SP52）	木製品	柱根				39.5	14.1	
10	SB01	古式土師器	壺	5	○			16.5	外面：浅黄橙色　内面：浅黄橙色
11	SB02（SP26）	古式土師器	器台	5	○			11.4	外面：浅黄橙色　内面：浅黄橙色
12	SB02（SP30）	古式土師器	甕	5	○				外面：橙色　内面：橙色
13	SB03（SP63）	古式土師器	甕	5	○				外面：浅黄橙色　内面：浅黄橙色
14	SB03（SP52）	古式土師器	壺	5	○			15	外面：橙色　内面：橙色
15	SB03（SP52）	古式土師器	高坏	5	○				外面：浅黄橙色　内面：浅黄橙色
16	SB03（SP92）	古式土師器	甕	5	○			23	外面：浅黄橙色　内面：灰白色
17	SA02（SP60）	古式土師器	甕	5	○				外面：にぶい黄橙色　内面：灰色
18	SE01	古式土師器	壺	5	○				外面：灰色　内面：灰色
19	SE01	古式土師器	鉢	5	○			9.5	外面：浅黄橙色　内面：灰白色
20	SE01	古式土師器	高坏	5	○			17.6	外面：浅黄橙色　内面：浅黄橙色
21	SE01	古式土師器	甕	5	○			18	外面：浅黄橙色　内面：灰白色
22	SE01	古式土師器	甕	5	○				外面：にぶい黄橙色　内面：にぶい黄橙色
23	SE01	古式土師器	甕	5	○			13.9	外面：にぶい橙色　内面：にぶい橙色
24	SE01	古式土師器	高坏	5	○				外面：浅黄橙色　内面：浅黄橙色
25	SE01	古式土師器	高坏	5	○			16	外面：浅黄橙色　内面：浅黄橙色
26	SE01	古式土師器	甕	5	○			14.4	外面：にぶい黄橙色　内面：浅黄橙色
27	SE01	古式土師器	壺	5	○			17.9	外面：にぶい黄橙色　内面：にぶい黄橙色
28	SE01	古式土師器	壺	5	○				外面：にぶい黄橙色　内面：浅黄橙色
29	SE01	古式土師器	高坏	5	○			27	外面：浅黄橙色　内面：浅黄橙色
30	SE01	古式土師器	高坏	5	○				外面：にぶい橙色　内面：にぶい橙色
31	SE01	古式土師器	高坏	5	○			13.5	外面：橙色　内面：にぶい橙色
32	SE01	古式土師器	壺	5	○			19	外面：浅黄色　内面：浅黄色
33	SE01	古式土師器	甕	5	○			15.5	外面：灰白色　内面：灰黄色
34	SE01	古式土師器	甕	5	○				外面：にぶい黄褐色　内面：にぶい黄橙色
35	SE01	古式土師器	甕	5	○				外面：にぶい橙色　内面：橙色
36	SE01	古式土師器	甕	5	○				外面：浅黄橙色　内面：浅黄橙色
37	SE01	木製品	槽	30		9	28.5	3.3	
38	SE01	木製品				2	15.9	2.1	
39	SE01	木製品				2.2	10.2	1.8	
40	SE01	木製品	斧柄			3.5	10	2.9	

色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠

図　版

図版１

１　調査前風景（南から）

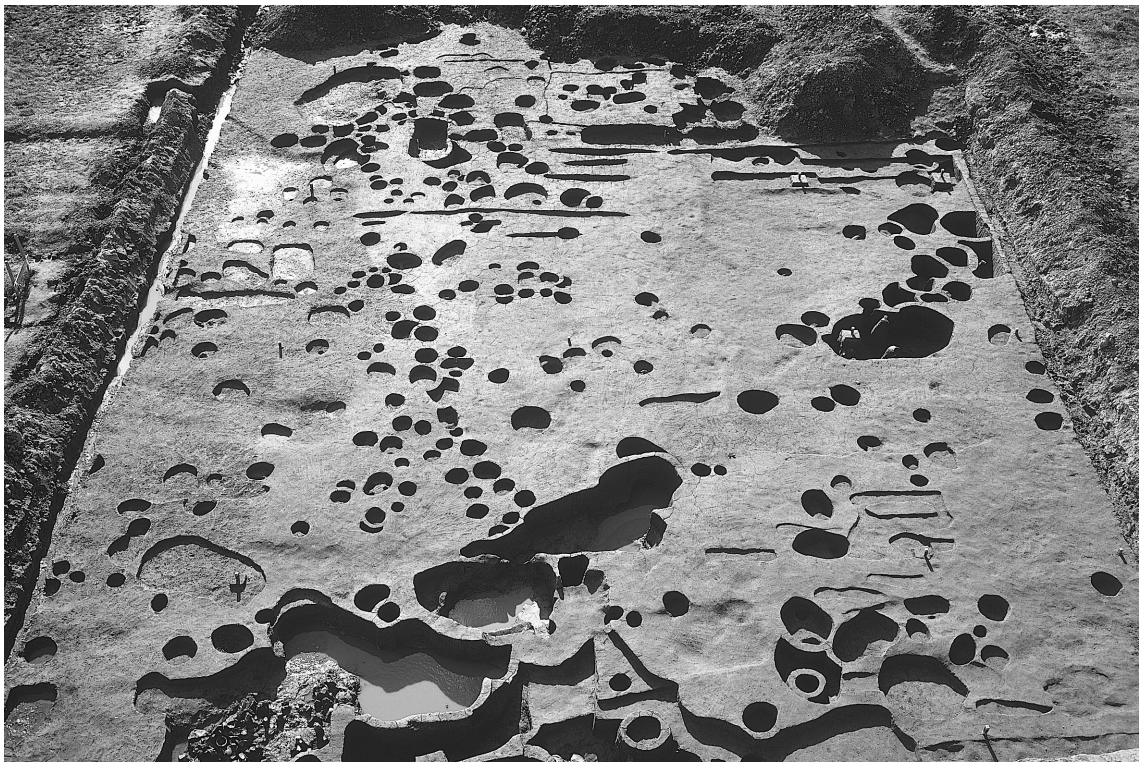
２　調査前風景（北東から）

1　調査区南半全景（北東から）

2　調査区南半全景（南から）

図版 3

1　調査区北半全景（北から）



2　調査区北半全景（北から）

1　縄文時代後期　SH03竪穴建物（南から）

2　縄文時代後期　SH03竪穴建物（北東から）

図版 5

弥生時代終末期から古墳時代前期初頭　掘立柱建物群（東から）

SB01掘立柱建物（北東から）

図版 7

SB02掘立柱建物（北東から）

1　SB03掘立柱建物（北から）

2　SB02（SP27）（南西から）

3　SB03（SP70）柱痕（北から）

図版 9

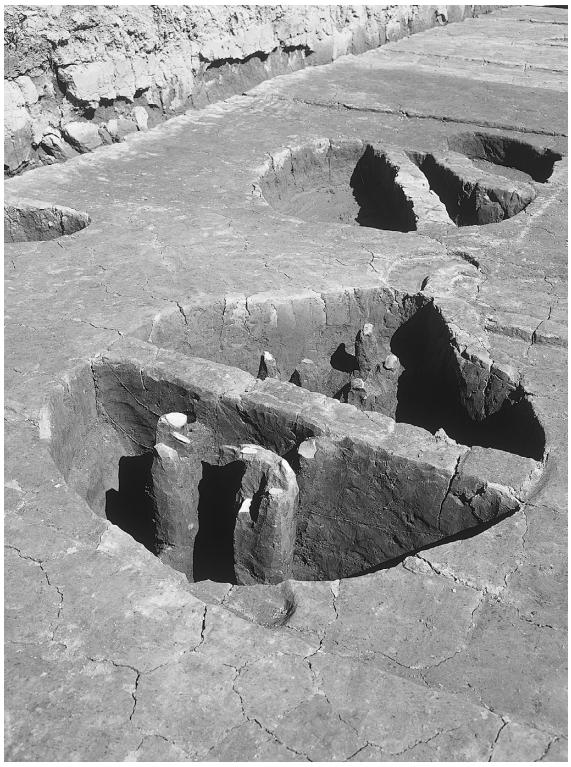
1　SB03（SP52）柱根（西から）

2　SB03（SP68）柱根（北から）

3　SB03（SP69）柱根（東から）

4　SB03（SP63）柱根（北から）

1　SE01井戸（南から）



2　SE01井戸　土層断面（南から）

3　SE01井戸　遺物出土状態（南から）

図版11

1　SB04掘立柱建物・SE01井戸（北から）

2　調査風景（北から）

1　SH03・包含層出土縄文土器（1）

2　SH03・包含層出土縄文土器（2）

図版13

1　SB03（SP53）柱根

2　SB03（SP63）柱根

3　SB03（SP68）柱根

4　SB03（SP69）柱根

1　SB03（SP52）柱根

2　掘立柱建物・柵出土土器

図版15

1　SE01出土土器（1）

2　SE01出土土器（2）

1　SE01出土槽

2　SE01出土木器

3　SE01出土斧柄

報　告　書　抄　録

ふりがな	いなべいせきだいにじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	稲部遺跡第２次発掘調査報告書
副書名	芹橋彦富線道路改良工事に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	61
編著者名	戸塚洋輔
編集機関	彦根市教育委員会 文化財課
所在地	〒522-0001 滋賀県彦根市尾末町１番38号　　TEL0749-26-5833
発行年月日	20150327

ふりがな	ふりがな	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
稲部遺跡（いなべいせき）	彦根市（ひこねし） 稲部町（いなべちょう）	25202	147	35度 12分 22秒	136度 11分 34秒	790.65㎡	20130724 ～ 20131227	道路改良 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稲部遺跡	集落	縄文時代後期 弥生時代終末期から 古墳時代前期	竪穴建物 竪穴建物 掘立柱建物 柵 土坑 井戸	縄文土器 土師器 青銅器 石器 木器	愛知川流域における弥生時代終末期から古墳時代前期の中核的な集落

要約	旧愛知川の支流の一つである文禄川・来迎川流域における弥生時代終末期から古墳時代前期（紀元３世紀～４世紀）の集落。独立棟持柱建物を含む掘立柱建物群、柵、井戸、青銅器鋳造に関わる工房跡とみられる竪穴建物、多数の土器を廃棄した土坑群が検出された。注目すべき遺物として、棒状青銅製品、土製品などの青銅器鋳造関連遺物、袋状鉄斧の柄や槽などの木製品が出土した。稲部西遺跡に隣接し、稲部西遺跡とともに文禄川・来迎川流域における中核的な集落とみられる。

彦根市埋蔵文化財調査報告書第61集

稲部遺跡第２次発掘調査報告書

―市道芹橋彦富線道路改良工事に伴う発掘調査―

平成 27 年（2015 年） 3 月 27 日発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課
滋賀県彦根市尾末町１番38号
TEL0749-26-5833

印刷・製本：西濃印刷株式会社
岐阜市七軒町15番地